



Author

柚本悠斗

Illustration

桜木蓮

ie ni kaeru to

kanaiyo ga

kanarazu nanika

shiteimasu

家に帰ると
カノジョが必ず
ナニかしています

先行試読版

Prologue

プロローグ

ie ni kaeru to
kanojo ga kanarazu
nanika shiteimasu

「んん……!?」

ある日の夜中。

寝苦しさに目を覚ますと同時に、思わず叫びかけて声を堪えた。

なぜなら、少しでも動けば唇が触れそうな至近距離に女の子の顔があったから。

薄暗い中、カーテンの隙間から漏れる僅かな外の灯りが幸せそうな寝顔を照らす。

小さな顔に完璧ともいえるバランスで配置されたパーツ。

透き通るような白く綺麗な肌に長いまつ毛が印象的な整った顔立ちは、少女としての可愛ら

しさを残しつつも大人の女性としての美しさを兼ね備えている。

そんな女の子が、俺のベッドで寝息を立てているからだ。

「……相変わらず慣れねえな。目が覚めて驚くの何回目だよ」

思わず眩きながら、溜め息が漏れる。

そう——こんな状況は、今に始まったことじゃない。

毎度のこととはいえ、女の子が隣で寝ている状況はやっぱり慣れない。



完全に目が覚めてしまい、水でも飲もうと起き上がった時だった。

「ううん……」

「——!?」

彼女は可愛らしいうめき声を上げながら、俺を捕まえるように腕にしがみ付いてきた。

なんとも言えない柔らかな膨らみを押し付けられ、あまりの気持ち良さにまた声を上げそうになってギリギリ堪える。

眠っている彼女は当然、下着を着けていない。

推定Dカップ——薄手の部屋着はダイレクトに感触を伝えてくる。

少しでも動けばより感触を楽しむことができる状況で、脳内の天使と悪魔が全面戦争を繰り広げるんだが、彼女はそんな俺の葛藤なんて知る由もなく腕を抱きしめてくる。

「勘弁してくれ本当……」

僅差で理性という名の天使が勝ち、彼女の腕をそつと離す。

起こさないよう、ゆっくりと布団をめぐりベッドから降りようとした時だった。

「ぐはっ——!?」

さすがに三度目にもなると声を堪えきれない。

なんと彼女の部屋着のボタンが外れていて、胸元が露わになっていた。

豊かな双丘は横になっているため重力に逆らうことなく強調されている。今はギリギリ隠れ

ているが、身じろぎ一つで見えちゃいけないものが見えてしまうのは確実だろう。

パジャマのボタン同様に俺の理性が炸裂^{さくれつ}しかける。

全力で目を背^{そむ}け、布団を彼女に掛け直してベッドを降りた。

「可愛い上に胸も大きいとか……思春期男子にとっちゃ暴力みたいなもんだろ」

そんなことを呟^{ささや}きながら、部屋の隅に置いてあるウォーターサーバーの水をコップに注^{そそ}ぎ、

一気に飲み干して冷静さを取り戻す。

ソファーに身を投げ、思わず天井^{てんじょう}を見上げた。

「なんでこんなことになったのか……」

そう——こんなはずじゃなかった。

いまだベッドで幸せそうな寝顔を浮かべている彼女。

その寝顔を眺めながら、今に至った経緯を振り返る。

❶ 誕生日プレゼントは美少女

ie ni kaeru to
kanojo ga kanarazu
nanika shiteimasu

人生は所詮^{しょせん}、マルチプレイではなくソロプレイだ――。

もちろん、全^{すべ}ての人に当てはまることではないのかもしれない。

だが、少なくとも俺^{おれ}にとって、十六年間生きてきた末に導き出された結論である。
どうだろう？　あながち間違っているとは言えないと思わないか？

どれだけ大切な友達や恋人を作っても、その関係がずっと続くとは限らない。

事実、大人たちは社会人になると学生時代の友人なんて疎遠だと口にし、運命の人だと信じて付き合った男女がクソどうでもいい理由で別れていく。

それは家族だって同じ。いずれは自立をしなければいけないのに、親離れや子離れができず過保護やニートになってしまったなんて話はざらにある。

そんなものに執着して関係を維持する労力に比べたら、初めから一人であることを受け入れて生きていく方がよっぽど楽だし建設的だと思わないか？

つまり『本当に強い人間とは、一人で生きていく強さを持つ者だ――』それが俺の信条。
その考えに至り、お一人様生活を始めてから一年ちよつと。



俺は一切の友達を作らず、ひたすら『孤独耐性』を上げることだけを考えてきた。

孤独耐性とは、俺が考える『一人で生きていく強さを表す指標』であり、あらゆるソロプレイをすることで上昇し、人と群れることで下降していくリアルのパラメータ。

可視化できないパラメータではあるが、昼休みに一人で過ごしたり、一人で帰宅することによって、逆に誰かに声^{だれ}を掛けられたり、親密になることで下がってしまう。

友達なんて作った日には、せっかく積み上げてきた耐性値がゼロになるようなもの。

そうやって孤独耐性を極めるべく過ごした日々は、とても充実していたと思う。だってそうだろう？

クラスでのポジション争いや派閥の対立など、誰だってその手の人間関係で悩んだことがあるはずだ。誰かの顔色を窺^{うかが}うような生活が禿げるほどストレスなのは語るまでもない。

一人でいれば、少なくともその手の面倒事から解放される――。

とはいえ、友達が不要だからといって周りが必要以上に距離を取る必要はなく、変に卑屈になる必要もない。一人といえど、生きて行く上で最低限のコミュニケーションは必要だ。

大切なのは、相手に期待せず、自分も期待されないこと。

相手に期待をさせれば好感度が上がる。その逆もまたしかり。

その積み重ねが友達という関係性を作り上げ、煩^{わづら}わしい人間関係を形成してしまう。だが、周りの連中に対して常にニュートラルに接していれば、やがて『仲が良くも悪くもな

い極めて普通のクラスメイト』というベストポジションを確保することができる。

そうすれば、理想とするお一人様生活への支障は最低限で済むだろう。

なんて、こんなことを言う『友達ができないだけだろ』と笑う奴やつもいるかもしれない。だが残念。そんなことは全くない。

俺は胸を張って『友達ができないんじゃない。作らないだけ』と言える。

理由は簡単。単純明快。

今言った『お一人様理論』の真逆を行えば嫌でも友達ができてしまう。そしてそれは、過去の俺が取ってきた行動そのものであり、俺自身が体現者であるからだ。

友達を作っていたからこそ、作らない方法を熟知しているにすぎない。

今にして思えば無駄な時間をすごしてきたと後悔しかないが、はぶられたぼっちではなく、自ら進んでぼっちでいる俺こそ『プロのぼっち』と言っても過言ではない。

そんな感じで、来週から始まる高校二年としての生活も、なに一つ変わることはない。

自称プロのぼっちとして一人で生きていく強さを身につけるべく、孤独耐性を極める日々。

ゆくゆくは独身公務員として、安定の下に定年退職を迎え気ままな老後をすごす。

それが俺の青春であり、人生設計だったんだが……。

それはある日を境に、あっさりと終わりを告げた。

つきよつきよのあかりのあかり
月夜野朱莉が『レンタル家族』としてやってきたあの日に――。

*

そのメールが届いたのは、春休みも終わりに近づいたある日のことだった。

俺のお一人様生活の基盤である1LDKのアパートで、同居しているはりねずみの源太（通称・源さん）にのんびり餌をあげていた時、不意にメールの着信音が鳴り響いた。

「メール……だと？」

驚きのあまり思わず餌をあげる手がとまる。

なぜなら、俺のメールアドレスを知っている奴は誰もいないからだ。

今のご時世、友達とメールするよりメッセージアプリでやり取りする方が便利だから！ なんて理由じゃない。そもそも俺のスマホにはメッセージアプリが入っていない。

つかさ、メッセージアプリってマジで害悪だと思わないか？

読んだ瞬間相手にバレるとか、返したくもないクソどうでもいい内容なのに、見てしまったが故になにか返さなきゃいけない義務感に苛まれる。さいな既読無視なんてしたら後から『なんで返事くれなかったの!』と言われ、まやかしの友情に亀裂が入ること間違いない。

俺にとっては不要な心配だが、それはともかく――。

「まさか……」

唯一心当たりのある人物の顔が頭に浮かび、慌ててメールを開く。

『誕生日おめでとう。今日着でプレゼントを送った。煮るなり焼くなり好きにしろ。父より』

「親父が今さら誕生日プレゼントだと……?」

父親とはもう一年も会っていないし連絡も取っていない。

俺が高校に入学するのを機に勤めていた外資系企業を辞め、行方^{ゆくえ}をくりました。それ以来、何度か連絡をしたものの返事はなく、どこでなにをしているかもわからない。

どうして今さらプレゼントを……ていうか、誕生日は来週なんだが。

とうとう息子の誕生日も忘れたかクソ親父!

そう思った矢先だった——部屋のインターホンが鳴り響く。

時計に目を向けると、時間はまだ朝の九時半。

親父のプレゼントを届けにきた配送業者だろう。

「源さん、ちょっと待っててくれ」

餌のミルワームを源さんの前に置いて玄関に向かう。

ドアを開けると、まさかの光景が目に見え込んだ。

「おはようございます!」

目を疑った。

そこには、一人の美少女が笑顔で立っていた。

肩の下まで伸びたストレートの髪が風になびく。やや下がりの大きな瞳ひとみと長いまつ毛が印象的で、浮かべている笑顔からは全てを受け入れてくれそうな優しさが窺える。

身長は百五十センチ台半ばといったところだろうか？ 春らしい薄いピンクのワンピースが身体からだのラインを強調していて、服の上からでもスタイルの良さが明らかだった。

「……部屋を間違えてませんか？」

とても配送業者には見えず、思わず出たのはそんな言葉。

それもそうだろう。

この一年で俺の部屋を訪ねてきたのは配送業者を除けば新聞勧誘と宗教勧誘。あとは隣の部屋のカップルが修羅場しやらばの時に、助けを求めてきたお姉さんくらい。

もしや美少女を使った新手の勧誘か？ 違うとすればドッキリを疑いカメラを探すレベルだが、幸いドッキリを仕掛けるようなお茶目な友人はいない。

つまり、こんな美少女が俺に用事があるはずがない。

「えっと……ここ、泉ヶ丘いずみがおかはやと颯人さんのお部屋ですよね？」

彼女は少し困ったような表情を浮かべながら俺の顔を覗き込むのぞ。

もはや驚愕きょうがくに震えるレベル。本当に俺に用事があつてきたらしい。

「はい……俺が颯人ですが、なんの用です？」

警戒しながら答えると、彼女の顔にぱっと笑顔が咲いた。

「私、月夜野朱莉です！」

弾んだ声で名のり、どうしてか、少しの間があった。

「……月夜野朱莉さん？」

思わず繰り返し返してみるが、心当たりはない。

「はい。今日からお世話になります。よろしくお願いします！」

「はい？」

今なんて言った？

「早速ですが、お邪魔しますね」

なんて考える間もなく、彼女は部屋に上がろうとする。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

慌てて彼女の肩を掴^{つか}んで引き留める。

「どうかされましたか？」

「どうかされましたものにも……いきなり部屋に上がられても」

すると彼女は察したような表情を浮かべ、顔を少し赤らめて叫ぶ。

「大丈夫です！ 部屋が片付いてないとか、ちよつと女の子に見られたら困るような雑誌が



あつても気にしません。むしろ私、興味も理解もある方なので安心してください！」

「いやいやいや、思春期男子に理解があるのは結構なことだけど、そうじゃなくて！」
動揺して攣む手の力が緩んだ瞬間だった。

彼女は俺の手をかわして部屋に足を踏み入れる。

「あら、綺麗にされているですね。大人な雑誌も見当たらない……」

なぜ後半、やや残念そうに言ったんだろうか。

「あっ！」

彼女はなにかを見つけたように声を弾ませ、それに近づいてしゃがみ込む。

「はりねずみを飼っているんですね。可愛い！ お名前はなんていうのですか？」

「名前？ 源太。俺は源さんと呼んでる」

「源さん。可愛い名前ですね。よろしくね、源さん」

絶賛食事中の源さんに触ろうとするが、源さんは丸まりながら針を立てて警戒モード。それでも彼女が触ろうとすると、源さんは完全に顔を隠してしまった。

いや、そんなことよりも――。

「本当にちょっと待ってください。いきなり家に押しかけてきて、今日からお世話になりますとか……月夜野さんだっけ？ どういうことか説明してください」

すると彼女はきよとした表情を浮かべた。

いやいや、そんな顔をしたいのは俺の方なんだが。

「聞いていらつしやいませんか？」

「だからなにを？」

「今日から私が、颯人さんのレンタル家族として一緒に暮らすことです」

「……はい？」

脳内に流れ込む情報が、一つも理解できずに抜けていく。

レンタル家族？ 一緒に暮らす？ こんな美少女と俺が？

いやいやいや、なにかの間違いだろ？

「快斗かいとさんから聞いていませんか？」

「か、快斗さんで……」

その名前に聞き覚えがないわけじゃない。

快斗——泉ヶ丘快斗。俺の親父の名前だ。

「じゃあ、月夜野さんは親父から言われてここに来たってことか？」

「はい！」

目眩めまいがして思わず頭を抱える。

どうやら冗談ではないらしい。

どこでなにをしているかもわからない親父から、わけのわからない状況を押し付けられてい

るってことか。あの親父らしい……相変わらず行動が読めないのは変わっていない。

「あの……本当ににも聞いていらっしやらないのですか？」

「ああ。聞いてないどころか、親父とは一年も連絡を取ってない」

彼女は心配そうに俺の顔を覗き込む。

すると彼女は、様子を察してか状況の説明を始めた。

「快斗さんからお仕事の依頼を受けて、颯人さんの身のお世話をさせていたかくことになりました。四月から毎週土日の二日間だけ、颯人さんの家族としてすごす契約です」

要約すると、そういうことらしい。

「マジかよ……」

なに考えてんだあのクソ親父は……。

「せっかく来てもらって悪いけど契約はなしだ。身の回りの世話といっても特に困っていることはない。自分のことは自分でできるし、不自由はしてないからな」

こう見えて料理は好きだし、掃除や洗濯は定期的に行っている。

なぜなら、一人暮らしは墮落しようと思えばいくらでもできてしまうからだ。

墮落はやがてメンタルを崩壊させる。一人で生きていく孤独に耐える強靱きょうじんなメンタルを維

持するためには、こうしたセルフマネジメントも欠かすことはできない。

でも、料理後の食器洗い……あれだけは面倒で、ついため込んでしまっんだよな。

だが、そんな俺の事情を知らない彼女は――。

「それはできません」

きっぱりと答えた。

「既に一年分の契約金もいただいています。仕事としてお引き受けした以上、誠心誠意お世話をさせていただきます！」

彼女は決意に満ちた瞳で俺を見つめる。

彼女が決意に満ちた瞳で俺を見つめる。
あいつ
むなもと
胸元でガッツポーズをするあたり本気らしい。

「今日のご挨拶だけと思っていました。せつかくなので掃除とお洗濯くらいはさせていただきますね。あ、これは契約外ですがサービスですので、お気になさらないでください」

一方的に告げると、鼻歌混じりに部屋を片付け始めた。

「いや、本当に待ってくれ！」

「年齢制限付きの雑誌を隠されるまで待った方がよろしいでしょうか？」

「そういう意味で待ってくれて言ってるんじゃないやねえよ！」

待ってくれなくてもちゃんと見つからない場所にしまっている。あまりにも見つかりにくいところに隠しすぎて自分でもわからなくなり、一年後とかに出てくるんだよね。

まるで成人雑誌のタイムカプセル。思春期男子なら誰もが経験あるだろ？

まあ、一人暮らしだから隠す必要なんてないんだけどな。

「わかった。とりあえず親父に連絡して確認するから、マジで待ってくれ」

スマホを手に取り、彼女に背を向けて親父の番号を表示する。

だが一年ぶりの連絡——発信ボタンを押すのが戸惑われた。

親父に最後に会ったのは忘れもしない、中学の卒業式だった。

あの時の衝撃は今でも覚えている——中学の卒業式を終えた帰り道、親父から会社を辞めたこと、そしてこれからは好きに生きていくと告白された。

驚きに言葉を無くしていると、スマホとかなりの金額が入った通帳を渡され『これでおまえも好きに生きていくといいさ』と、親父が借りたこのアパートの前で車から降ろされた。

半ば放心状態で部屋に入ると、なにもない部屋にケージに入った源さんがいたわけだ。以来、一度も会っていないし連絡も取っていない。

「すっげえ気が重いが……そうも言ってられないか」

腹を括って電話を掛ける。

だが電波が圏外らしく、すぐに携帯電話の音声ガイダンスが流れた。

「悪い。親父と連絡が取れないんだ。とりあえず今日のところは——？」

口にしなから振り返ると、彼女の姿が見当たらない。

「あれ？」

僅かな時間に忽然と姿を消した彼女。

すると、洗面所の辺りで物音が聞こえた。

洗面所の掃除か？ 近づいて覗きこむと同時、思考がとまった。

「はあああああ……」

「……」

目の錯覚だろうか？ いや、どうか錯覚であってくれ。

どうしてか彼女は、俺のボクサーパンツを顔に当てて恍惚の表情を浮かべていた。
理解し難い状況に驚きを抑えつつ考える。

彼女には、なにかそうしなければいけない事情があるんだろうか？ 俺のパンツを愛おしそ
うに握り締め、顔に当てながら悩ましい声を上げる可能性——。

皆無だった……やはり彼女がパンツを嗅いでいるようにしか見えない。

「ふひひっ……」

その美貌からは想像もつかない笑い声が聞こえた気がした。

「えっと……なにしてんのかな？」

恐る恐る聞いてみる。

彼女は一瞬だけ真顔になってフリーズしたが、次の瞬間。

「お洗濯をさせていただこうと思って、タグについている品質表示を確認していたんです」

彼女はそう答え、やましきなんて微塵も感じ取れない満面の笑みを浮かべた。

なるほど。品質表示の確認だったのか。それなら考えられなくもない。

あぶないあぶない。危うく初対面の女の子に変態疑惑をかけてしまったところだった——でも男物のパンツを洗うのに、品質表示なんて確認する必要あるか？

「快斗さん、ご連絡つきましたか？」

「え？ あ、いや……それがさ、電波が繋がらなくて」

「そうでしょうね。あんな山奥では滅多に連絡なんてつかないと思いますよ」

彼女は洗剤と柔軟剤を洗濯機に入れながら、まるで知っているかのように口にする。

「……あんな山奥？ 月夜野さん、居場所を知ってるのか？」

「はい。この仕事をお受けするために一度会いに行きました」

彼女は洗濯機の蓋を閉めると、不意に俺の手を取った。

「なっ——!？」

「ちょっとこちらへ来てください」

余りに突然のことで、さすがにドキッとしてしまった。

彼女にとっては大したことではないのかもしれないが、女の子に手を握られるなんて何年ぶりだろうか？ ここ数年、源さんの手しか握った記憶がない。

たぶん女の子の手を握ったのは、小学校六年生の時のフォークダンスの練習が最後。

めっちゃくちや嫌そうな顔をするクラスの女子に『さきつちよだけ！ さきつちよだけだか

ら！』と懇願し、しぶしぶ指先だけ繋いでもらった記憶が甦る。

おかげでしばらく友達から『ミスターさきつちよ』って呼ばれたんだぞクソが。

彼女の手は温かく柔らかで、源さんのプニプニした手とは違った気持ち良さがあつた。

「これを見てください」

部屋に戻りソファに座ると、彼女はスマホを差し出してきた。

スマホを受け取り覗きこむと、画面には某動画サイトが表示されている。

再生されているのは、上半身裸の中年男性が山奥で自給自足生活を送っている様子を動画にしたものらしい。

自分で作ったと思われる小屋を背に、焚火たきびの前で肉にかじりつく姿。

関連動画を見ると、他にも自作の風呂ふろや畑、食器などを作る動画もある。

チャンネル名は『四十歳で会社を退職したブッシュクラフト親父の日常。』

チャンネル開設は一年ほど前で、登録者数は三十万ちよつと。一年間で三十万ならそれなりの人気チャンネルだろう。よくわからんが。

だが四十歳で社会からドロップアウトとか、将来設計もくそもあつたもんじゃない。人生を舐なめているようなタイトルが本人の無計画な人間性を物語っている。

本当は会社をリストラされて金がないから山籠こもりしてるんじゃないか？

少なくとも俺はこうはならないと思ひながら見ていると、動画の最後に配信者が映る。

画面アップで笑顔を浮かべながら横ヒースする姿を見た瞬間、叫んでしまった。

「お、親父——!?」

舐めたタイトルの人気チャンネルの配信者は、俺の親父だった。

「一年間も音信不通でなにやってんだこいつは！」

思わずスマホを投げ捨てそうになった。

「群馬県と新潟県の県境にある山奥で暮らしています。週に一度、動画のアップのために下山するそうなのですが、連絡がつくのはその時くらいでしょうね」

「月夜野さん……まさかここまで行っただの？」

「はい。装備を整えて行きましたが、三日ほどかかりました」

笑顔でとんでもないことを言っただぞ。

親父も大概だが、そんな親父に会いに行く彼女も大概だろ。

会いに行こうとするバイタリテイが恐ろしい。

「そんなわけですから、改めてレンタル家族として、よろしく願いしますね」

「いや、状況はわかったけど、だからと言って——」

俺の返事も聞かず、彼女はさっと立ち上がり。

「とりあえず、お洗濯とお掃除の続きをやってしまいますね」

制止も聞かず、モリモリと作業を始めた。

そんな姿を横目に、俺は頭と源さんを抱えるしかなかった。

しばらくして、洗濯と掃除を終えた彼女が戻ってきた。

「今日は初日ですので、これで失礼しますね」

「あ、ああ……」

その間、どうしたものかと悩んでいたが答えは出ない。

「次にくるのは来週の週末です。といいますか、これから毎週土日はお世話になります。レンタルとはいえ家族ですから、なにかあれば遠慮なく言ってくださいね」

「とりあえず、それまでに親父に連絡がつくよう努力をしてみるよ……」

彼女は『頑張ってくださいね』と^{ねち}労いの言葉を口にした。

頑張ったらレンタル家族契約はなしになるんだが、わかっているんだろうか？

「今後は土曜の夜にお泊まりさせていただくことになりますので、色々と必要なものを揃^{そろ}えないといけないですね。私のパジャマとかタオルとか、お風呂用品とかも——」

「待て待て待て！ え!? 泊まり!？」

「家族ですから、当然ですよ」

「いやいやいや！ それはさすがにダメだろ！」

「颯人さん、家族というのは一つ屋根の下で寝食を共にするものですよ」

彼女は至って真顔で『なにか問題でも?』と言わんばかりに答える。

いやいやいや、問題しかないだろ。主に俺の下半身的に。

「家族がどうか知らないけどさ、赤の他人の若い男女が泊まりとかまずいだろ」

「あら、颯人さんはまずくなるようなことを私にするつもりなのですか?」

「いや、そういうわけじゃなくてだな……世間的にもさ」

「大丈夫です。私、全然そういうの気にしませんから」

彼女のいう気にしないとは、いったいどちらの意味だろうか?

まずいことをされても気にしないのか、世間体を気にしないのか。

前者だったらどうしよう。その気はなくてもちよつとトキメク。

「ではまた来週、よろしくお願いします」

そう口にする、彼女は源さんの前にしゃがみ込む。

警戒されているのもお構いなしに、そつと優しく両手で抱きあげた。

「源さんも、これからよろしくね」

そう声を掛けると、もぞもぞと動いて顔を出す源さん。

「あ、そうだ!」

彼女はなにやら思い出したかのように声を上げ、かばん鞆から封筒を取り出した。

「これ、快斗さんから預かったものです。一人の時に開けるようにと仰おつしやっていました」

「俺に？ あ、ありがとう」

お礼を口にする、彼女はやたら上機嫌で帰ったのだった。

彼女を見送った後、一気に疲れが押し寄せて源さんを抱きしめながらソファに沈む。

「マジかよ……なんだよレンタル家族って……どうする源さん？」

源さんは俺のお腹なかの上であおむけになりながら、我関せずと言わんばかりに寝始めた。マイペースな源さんが愛いとおしい。生まれ変わったらはりねずみに生まれない。

そんな現実逃避をしながら、受け取った封筒を開ける。

『誕生日プレゼント、可愛いだろ？ 感謝しろよ（笑）父より』

「あの野郎……」

事情を察し、怒りのあまり手が震える。

「あれか!? 彼女が誕生日プレゼントってことか！ ふざけんなクソ親父！」

手紙をビリビリに破いて投げ捨てる。

「マジでどうすんだよこれ……ん？」

溜め息を吐きながら窓の外を眺めると、違和感に気付いた。

ベランダには彼女が干してくれた洗濯物があるんだが、おかしい……昨日穿^はいていたはずのお気に入りのボクサーパンツが見当たらない。

まあいい……今はそれどころじゃない。その辺にあるだろ。

前途多難すぎる新学期の幕開けに、頭を抱えるしかなかった。

*

四月に入り、学校が始まった。

今日から高校二年生として新しい生活が始まる。

教室では既にクラスメイトが新しい人間関係を構築しようとして盛り上がっていた。

俺の通う望都^{もといま}今泉高校には多くの学科がある。

普通科の他にも流通経済科、情報技術課、農業科、服飾デザイン科の計五つ。

そのため各学科の特別教室も多数あり、校舎は五つと他の高校に比べて多い。

教員室や生徒会室がある管理特別棟、服飾デザイン科の実習室がある南棟、一般教室と情報技術科の研究室がある大きめの中央棟、そして流通経済科と農業科関連の教室のある北棟。

最後に少し離れた場所にある進路・教育に関するキャリアガイダンス棟。

そんな多くの学科のうち、俺が所属するのは情報技術科。

クラスも学科ごとに別れ、情報技術科は二クラス。

つまり、クラス分けをしても半分は一年の頃と同じ奴らということになる。

新しいクラスでは面識のある者同士が集まり、お互いに友達を紹介し合う。そうやって新しい人間関係を作り、クラスでの立ち位置の確立やグループ作りに精を出すんだろう。

ご苦労なこった——それらの行為が、将来的にクソの役にも立たないとも知らずに。当然俺は、そんなクラスメイトを気にもせず一人窓側の席でうな垂れる。

別にクラスに馴染^{なじ}めなからじゃない。

というか、馴染むつもりは全くもってない。

自称プロのぼっちとしての生活は二年になっても変わらない。

俺の掲げるお一人様理論——。

その① 人に期待せず、人に期待されず。

その② 周りに対しては常にニュートラルに。

その③ 必要最低限のコミュニケーションでやりすごす。

絶対の掟ともいえるこの理論の下、煩わしい人間関係を回避してお一人様生活を謳歌する。その中で、一人で生きて行く強さを身につけるべく孤独耐性を極める日々。

それが俺の青春であり、将来、独身公務員としての人生を全うする足掛けとなる。

じゃあなぜ、うな垂れているかって？

理由は一つ、先日やってきた月夜野朱莉の件——。

どれだけ考えても対応策は思いつかなかった。

その気になれば家に上げないという選択肢もあるが、そのせいで部屋の周りをうろつかれても困る。

また彼女のタイプからして、おそらく拒否をしても無駄だろう。

最低限、相手を納得させない限り平穏なお一人様生活は取り戻せない。

とりあえず親父にはメールをしておいた。

かなり長文で送りつけてしまったが、要約すると『レンタル家族とかふざけんなクソ親父。

山籠もりなんてしないで早く契約解除しやがれ。動画は面白かった』というもの。

あの後、親父がなにをしているのか気になり動画を全部見てしまった。

なにも持たずに山に籠もり、ゼロから必要なものを作っていく生活。

家作りや畑作り、風呂や陶器まで作る徹底ぶり。罌^{わな}を設置して鳥やイノシシなんかを捕ま

えて捌^{さば}いてみたり、ぶっちゃけ下手なドキュメンタリー番組より面白い。

俺の目指す方向とは違うものの、ある意味これも一人で生きていく強さの体現だろう。

近々シーズン2が始まるらしい。今から楽しみで仕方がない。

「おっはよう♪」

そんなことを考えていると、元気で可愛らしい声が教室に響いた。

視線を向けると、そこには一人の女子生徒と彼女を取り巻く男子生徒たちの姿。

彼女の名前は戸祭羽風とまつりはな——同じ情報技術科に通う女子生徒。

肩にかかるナチュラルに明るい髪と瞳の色が目を引き美少女で、身長は百五十センチそこそこで小柄。美人というよりも可愛らしいタイプで、その辺の芸能人よりよっぽど可愛い。

性格は一言でいうなら天真爛漫てんしんらんまんでぶりっこ。

愛嬌あいきょうの塊のような奴で男女問わずモテまくり、スクールカーストのトップに君臨していて

彼女を知らない奴はいない。人を区別せず、誰とでも仲良くできるのも人気の理由だろう。

「みんな送迎ありがとね。また放課後〜」

戸祭が笑顔で手を振ると、男子生徒たちは感極かんごくまったのか涙を流しながら最敬礼をして去っ

て行く。彼らはペットと呼ばれる戸祭の取り巻きたちで、本人曰く『オトモダチ』らしい。

何号までいるかは知らないが、おまえらそれでいいのか？

なんでも、彼女自身が特定の彼氏は作らない主義と公言しているらしく、日々押し寄せるとんでもない数の告白を片っ端から笑顔で断り続けたらしい。その数三桁けた。

結果、連中はその気持ち^くを汲んで皆で愛めでようと、涙を呑のんで紳士協定を結んだらしい。

ぶっちゃけ、ただの負け惜しみにしか聞こえない。

くだらない青春すぎる。他にもやることあるだろおまえら。

ちなみにこれ、全部クラスメイトが話しているのを盗み聞きした情報だ。

当然だろ、そんな恋バナみたいな話をする相手なんかいない。プロのぼっちにとって、情報収集は寝たふりか本を読むふりしながらクラスメイトの会話の盗み聞きがデフォルトだ。

そうして得た情報は、お一人様生活を支える^{いしずえ}礎となる。

「なんだか騒がしくなりそうだな……」

クラスを中心人物のキャラクター次第でクラスの色は決まる。

それがあの戸祭羽風だとしたら、おそらくこのクラスは学年で最も騒々しいクラスとなるだろう。それくらい戸祭のパーソナリティは人を引き付けるものを持っている。

下手に巻き込まれないよう、しっかりと対処する必要があるそうだ。

我関せず、窓の外を眺めながら考えている時だった――。

「ぐはっ！」

「おっはよう泉ヶ丘君♪」

油断しているところを、戸祭に全力で背中をぶつ叩^{たた}かれた。

「お、おう。おはよう」

痛む背中を押さえながら挨拶を返す。

そう。こいつはこういう奴なんだよ。

他のクラスメイトが誰一人として俺に挨拶をしてこない中、こいつだけは挨拶をしてくる。一年の時から一緒のクラスなんだが、どうしてか定期的に絡^{から}んでくるんだ。



だから俺にとって、戸祭は唯一の天敵とも言える存在だった。

「今年も同じクラスだね。よろしく♪」

戸祭はそれだけ言うと、他のクラスメイトの下へと去って行った。

無邪気に声を掛けてきやがって……おかげで孤独耐性が下がっただろうが。

心の中で戸祭に文句を言った時だった。

「二年になつてもあの子は変わらないね」

隣の席から、そんな声が聞こえた。

視線を向けると、そこには席に座ってこちらに視線を向ける女子生徒の姿。

明らかに染めている髪色に着崩した制服。しっかりと濃い目の化粧をしているあたり、不良とまでは言わないにしろ明らかに軽い感じのする女子だった。

「……」

どうしてか、しばらく無言で見つめ合う俺たち。

今のはもしかして、俺に話しかけたんだろうか？

俺は過去、クラスメイトから声を掛けられたと思って返事したら、声を掛けられたのは後ろの席の奴だったという事件があつて以来、すぐに返事を返さないように徹底している。

あの時の『え？　なんでおまえ？』感はプロのほっちといえどさすがに気まずい。

念のため辺りの席を見渡してみるが近くに他の生徒はいない。

マジか。また孤独耐性が下がったんだけど。

「そうだな。少しは大人しくしてくれるのを願うよ」

初めて見る女子生徒だが、だからだろう、俺に話しかけてくるのは。

俺のことを知らない奴が、たまにこうして話しかけてくることもある。

座席表で確認すると、築瀬^{やなせ}みゆきと書いてあった。

「隣の席同士、よろしくね」

「ああ。ほどほどによろしく頼む」

早速だが、『お一人様理論その③ 必要最低限のコミュニケーションでやりすごす』

雑な対応はせず、かといって会話を膨らませもしない。一言二言で終わらせることで距離を

必要以上に詰めないように無難に返す。

特に女子は、変な噂^{うわさ}を流されると爆発^{ばくはつ}的に広まってしまう危険性が高い。そのネットワーク

は繋がり先の見ええない厄介なもので、一度のミスが命取りになりかねないからだ。

「新学期からやかましいぞ。さっさと席に着けガキども」

すると、担任の女性教師が教室にやってきた。

パンツスタイルのスーツ姿で長い髪をかき上げながら、気だるそうに着席を促す。

この教師の名前は駒生^{こまぎまう}ゆかり。独身のアラサー女子で担当は現代文。

三十路前に危機感を覚え、去年から本格的に婚活を始めているそうだが状況は芳しくないら

しい。自身で婚活アプリを七個同時にやっていると言言している。

全くもって知らない情報だが、駒生先生は嫌なことがあると授業をやらずに自分の不満を語り続ける癖があり、婚活で出会った男の愚痴で何度か授業を潰したことがある。

本人曰く『結婚できないんじゃない。しなかっただけ』負け惜しみにしか聞こえない。

誰が見ても満場一致で不良教師なんだが、どうしてか、PTAや校長からは高い評価を得ているから謎だ。一部ではPTA会長や校長の愛人説も挙がっている。

見た目が綺麗なだけに、問題は容姿ではなくて性格だともつばらの噂。

「戸祭、取り巻きの男どもを教室まで連れてくるな。私への当てつけか？」

「違いますよ。先生の魅力に比べたら、わたしみたいな子供なんて相手になりません」

「次から気を付ける。若い男をはべらせまくなとか、嫉妬で頭がおかしくなりそうだ」

「はぁーい。気を付けまーす♪」

とても教師と生徒の会話とは思えない。

「さて、おまえたち——」

教壇に立った駒生先生は口にする。

「私が担任になったのが運の尽きだ。最初に言っておくが、私にはおまえたちの面倒を見ている暇なんてない。自分たちの好きなようにしろ。知ってのとおり、私は婚活で忙しい」

クラスメイトたちが絶句する。

教師とは思えない発言も、ここまでくるといつそ清々^{すがすが}しい。

「言葉のとおり、本当に好きにすればいい。口うるさい教師どもよりよっぽどマシだろ？ 本来生徒の自主性なんてもんは、ある程度の自由の中でしか活かせない。私はおまえたちの面倒を見ない代わりに縛りもしない。この一年間を生かすも殺すも自分次第。ただし、その代わり自分たちの問題は自分たちで解決しろ。ケツの拭き方くらい学生のうちに憶^{おぼ}えておけ」

中には面食らう生徒もいるだろう。

ただ、俺にとつては納得できる部分もあった。

自立とは、最低限自分のことは自分でできることを意味する。

学生のため金銭的なものは親を頼らざるを得ない。だがそれ以外において、なにをするにも自己責任という駒生先生の言葉は、俺の掲げるお一人様理論に通じるものがある。

噂では酷^{ひど}い不良教師と聞いていたが、案外どうだろう？

少なくとも俺にとつて、そう悪くないのかもしれない。

「そんなわけで一年間、このメンバーでやっていくわけだが、最初に一人紹介しておく。転校生の紹介だ。男子ども泣いて喜べ。美少女だ——十年前の私そっくりのな」

一瞬歓喜に沸いた男子生徒たちが、次の瞬間トーンダウンする。

十年前の先生にそっくりとかリアクションに困るだろ。

「入っていいぞ」

駒生先生が入口に向かって声を掛ける。

すると戸が開き、一人の女子生徒が入ってきたんだが――。

「は……？」

信じがたい光景に、思わず思考がとまった。

女子生徒は満面の笑みで教壇に立ち、一度小さくお辞儀をする。

「はじめまして。月夜野朱莉です」

目になっている状況を、頭が理解してくれない。

「どうか、よろしくお願いします」

目の前に現れたのは、先日レンタル家族としてやってきた少女――。

再び歓喜に沸く男子どもの声が、どこか遠く聞こえる。

頭の中で警鐘が鳴り響く――なんで悪い予感するのは当たるんだろうか。

この時の俺は、自分のお一人様生活が脅かされるんじゃないか？

そう直感的に感じていた。



2 始まる同居生活と、家族ルール

そんなこんなで新学期が始まって数日。

つまり、月夜野朱莉が転校してきてから数日後のこと。

俺は、多大なる戸惑いを感じていた。

月夜野朱莉が同じ高校に転校生としてやってきたこともそうだが、まさか同じ学科で同じクラスとは。それ以上に、彼女が俺に一言も話しかけてこなかったことについて。

お一人様生活を望む俺としては、それはそれで助かるんだが……。

当の本人は、早くもクラスに馴染んできているようだった。

こうして昼休み、一人で読書をしているふりをしながら彼女の様子を窺っているんだが、仲良くなったクラスメイトと楽しそうに歓談をしている。

転校生ともなれば、よっぽどのコミュ障じゃない限り注目を浴びる。

彼女も例外なく注目を集め、クラスの女子たちと仲良くなった。

転校してきた時期が一学期で、面倒な人間関係が出来上がる前だったというのも良かったんだろう。既に完成されたコミュニティの中に加わるのはさすがに難しい。

ie ni kaeru to
kanojo ga kanarazu
nanika shiteimasu



そうやって彼女を観察していて、いくつか気付いたことがある。

まず、性格は真面目であり、それでいて社交的であり、どこか育ちの良さを窺わせる。

歩き方や身のこなしが上品で、さらに美少女とくれば男たちが放っておくはずがない。戸祭^{とまつり}ほどではないにしろ話題となり、よそのクラスから男たちが見にくるほどだ。

二つ目に、とても頭が良いということ。

どうやら前の学校は進学校だったらしく、俺たちが二年になって学ぶことを前の学校では一年の時に学んでいたらしい。授業態度も良く、典型的な優等生といえる。

三つ目、運動はあまり得意ではないらしい。

体育の授業は男女別のため見たわけではないが、少しどんくさいところがあると女子にいじられていた。大きな胸がじゃまなだけじゃない？ともからかわれていた。

確かに胸は大きい……推定Dカップ。男子の卑猥^{ひわい}な視線を集めているだけはある。

兎にも角にも、早くもクラスで存在感を大きくしていた。

「いったいなにを考えてんだ……」

話は戻り、どうして俺に声を掛けてこないんだろうか？

すでに俺が孤立していると知っている他の奴^{やつ}らならまだしも、彼女は知らない。

もちろん、だからといって必要以上にグイグイ来られても困るが、お互い面識がある上に同じクラスだったことについて、向こうも驚いたことだろう。

であれば、なにかアプローチがあってもいいはずだ。

悩んだ末、俺はこちらから彼女に声を掛けることにした。

自分から声を掛けるなんて孤独耐性を下げる最も愚かな行為だが仕方ない。

少なくとも、レンタル家族の件だけは早急に口止めをしておかなければならない。

自分から誰かに声を掛けるなんていつ以来だろうか？

あれは確か中学三年生の終わり。

お一人様生活を始めて間もない頃、学校でクラスメイトの女子の財布を拾ったから届けてやったのに舌打ちで返されたのが最後だ。

それ以来、俺は落とし物を見かけたら見ぬふりをするよう徹底している。

また舌打ちされた時のことを考えながら、彼女が一人になるタイミングを窺い始めた。

なかなかどうして、彼女に声を掛けられるタイミングがやってこない。

勘違いされないように最初に言うておくが、あまりにも自分から話しかけなくなったせいで声の掛け方を忘れたとか、緊張しすぎて手汗がびっしょりだからではない。

転校生補正だろう。クラスメイトが過剰にコミュニケーションを取っていることもあり、常に誰かしらと一緒に。自分だったらいい加減ほっとけとキレてしまいそうだ。

だが、チャンスはお昼休みにやってきた。

彼女は一人で教室を後にし、俺も意を決して後を追う。

しばらく一人で歩いていたが、不意に彼女が廊下を曲がった。

見失わないように急いで追いかけて、廊下を曲がった直後だった――。

「私になにか用かな？ 泉ヶ丘君」
いずみがおか

どうやら後をつけられていることに気付いていたらしい。

待ち構えていた彼女が、笑顔でそう口にした。

だが、その表情や声音に違和感^{こわね}を覚える。

「あ、ああ……ちょっと話がしたくてな」

「なに？ お話だったら教室でもいいんじゃない？」

やっぱり違う。

俺の部屋で話していた時は敬語だったのに、今は普通にため口だ。

いや、同じ学年のクラスメイトなんだから当たり前か。

「ちよっと人前では話にくいことなんだ」

言いかけて、不意に両手で口を押さえられた。

彼女は周りを確認するようになしぐさを見せると俺の手を取り。

「こっちにきて――」

逃げるように小走りで俺を連れて行く。

やってきたのは、人気のない階段の裏だった。

「ここなら大丈夫ですね」

彼女の声音が変わるのがわかった。

敬語——初めて話をした時と同じ。

「驚いたよ。まさか同じ学校で、同じクラスになるなんてな」

「私は快斗^{かいと}さんから同じ学校だと聞いていましたから。でも、同じクラスになれるとは思ってなかったので嬉しい^{うれ}いです。もうこれは運命^{うね}といっても過言^{かごん}ではありませんね！」

いや、過言^{かごん}だろ。過言^{かごん}すぎるだろ。

そんな目を輝かせて言われても困る。

「それで、お話^わというのはなんでしょう？」

「あ、ああ……その、この前の件^{けん}についてなんだが」

すると彼女は、口の前で人差し指を立て。

「その話は、学校ではやめましょう」

少し真面目な口調で言った。

「私たちの関係は秘密にしておくべきだと思います。少なくとも、二人きりの時とは違う接し方をした方がいいのではと。クラスのみなさんに理解していただけたとは思えません」

その言葉に、俺は胸を撫なで下ろす。

「わかってるなら助かる。思春期真っ盛りの高校生なんて、どいつもこいつも恋愛脳ばかりで誰と誰が怪しいとか噂うわさするのが大好きだからな。自分がそのターゲットになるのは勘弁だ」
それだけはなんとしても避けたい。

「わかりました。学校内では普通のクラスメイトとして接します」

「そうしてくれ。俺もそうする」

「他人行儀に感じることもあるかもしれませんが、許してください」

「気にしないでいいさ。無視してくれるくらいが丁度いい」

「なるほど。学校では放置プレイをご希望ということですね！」

勘違いも甚だしい。まるで俺がそう望んでいるみたいじゃないか。そりゃクラスでソロ活動していたらある意味放置プレイみたいなもんだが、俺じゃなかったら泣いてるぞ。

突っ込むのも面倒だからそれでいいや。

それに、彼女はまだ知らないのだから仕方がない。

俺がこの一年間、こういう立ち回りをしてきて今に至るかを。

「週末、楽しみですね」

「その件についてはまだ受け入れてないぞ」

そう口にする、今度は小さく笑った。

「受け入れてもらえるように頑張りますね」

「いや、努力でどうこうって話じゃなくてな……」

「先に戻ります。午後のホームルームの前にお手洗いにいきたくて教室を出たので」

「そいつは悪かったな……」

小走りで去っていく彼女を見送りながら、溜め息が漏れてしまう。

やっぱり彼女の中で、レンタル家族契約は確定事項らしい。

どうしたものか……新学期早々、溜め息を吐いてばかりだ。

教室に戻ったのは、始業のベルが鳴ると同時だった。

すぐに駒生先生こまにゆうがやって来て、教室に入ってくるなり口にする。

「クラス委員長を決めろ。方法はおまえたちに任せる。私は婚活アプリで男探しをしているから決まったら声を掛けろ。仕切りはそうだな……戸祭。おまえがやれ」

「えー！ わたしそういうの苦手なんですけどー」

「学校の知名度を誇る奴がなにを言っているこのぶりっこが。いいからやれ」

「はあーい」

戸祭は嫌そうに声をあげながら、それでも席を立てて教壇に向かう。

嫌と言いながら、それでも従うあたり根は素直なんだか目立ちたがりなんだかわからん。

「駒生先生、ちなみに決まった後ってどうするんですか？」

「どうもしない。私の邪魔をしなければ授業が終わるまで好きにしてろ」

さすがにフリーダムすぎるだろ駒生先生。

「やった！ それじゃちゃちゃつと決めて遊ぼう！」

戸祭の言葉に、クラスメイトが歓喜の声を上げた。

「たぶんいないと思うけど、一応聞いておこつかな。やりたい人がいたら手をあげてー」
静まり返るクラスメイト一同。

そりやそうだ。クラス委員長なんて雑務、好んでやりたがる奴なんていないだろ。

「だよねえ。じゃあ推薦で！ さっそくだけどわたしから推薦しまーす」

そう言いながら戸祭は一人の女子生徒を指差す。

「月夜野さん、どう？」

まさかの指名だった。

指名された彼女は、戸惑いのあまり辺りを見回す。

いやいや、他に月夜野さんはいないだろ。

「私……？」

「そう！ ほら、転校してきたばかりで学校のこともまだ詳しくないと思うし、クラス委員長

をやることで学校を知るきっかけになると思うの♪ それにさ、このクラスだけじゃなくて他のクラス委員長との付き合いもあるし、友達関係も広がると思うんだよね!」

そんな戸祭の猛ブッシュを聞きながら確信する。

戸祭は自分がクラス委員長をやらされないために、彼女を推薦したんだろう。

戸祭はどう見てもこのクラスの中心人物だ。推薦となれば必ず名前が挙がるだろうし、そして挙がった以上、戸祭の人気を考えれば圧倒的多数で支持されるはずだ。

目立ちたがりのくせに面倒事は嫌い——そんな性格が見て取れる。

本当、その辺の立ち回りも抜かりがない奴だ。

「そうね。みんなが私でいいって言ってくれるなら、やってみようかな」

「決まりだね!」

その瞬間、教室が拍手に包まれた。

「先生、クラス委員長が決まりましたー!」

「ああ、早かったな。私はちょうどイケメンとマッチングしたところだ。ここからが勝負——早速に食事の約束を取り付けたい。好きにしていいいから邪魔だけはしてくれるなよ」

「はぁーい♪」

こうして、我がクラスの委員長が三分で決定したのだった。

*

そんなこんなで、新学期の初期イベントを一通り終えた週末。

とうとう土曜日の朝が来てしまった……。

気が重すぎる。気が重すぎて朝から胃が痛い。

残念ながら、契約の件について進展はなかった。

相変わらず親父から返信はないんだが、動画サイトに最新動画が上がっているのはどういことだ？ 絶対メールは受信してるだろ！ 読んでないのか無視してんのか!?

ちなみに親父のチャンネルの最新動画の内容は、これまで暮らしていたホームキャンプを變更し、別の場所で一から生活基盤を作り直すというものだった。

『ブッシュクラフト親父の日常。シーズン2——第一話 家造り』

まずは木を切り倒すための石斧の作成から。

ちようどいいサイズの石を見つけると、粗い石で砥いで形を整え、次に細かな石で刃を鋭利に仕上げる。用意した六十センチほどの木の棒に穴を空け、石をはめ込んで完成。

石斧で切り倒した木を柱として据え、植物のツルを使って細かな骨子を組み上げる。

その上に大きな植物の葉を何層にも重ねて屋根を作った。

次に、粘土質の土と水を混ぜて作った泥を重ねて壁を塗っていく。

その工程で部屋の一面に暖炉を作り、排煙用の煙突も合わせて作成。最後に木で作ったドアと窓を付けると、人一人が住むには充分すぎる家ができた。

中でも驚いたのは、床を掘って石で蓋ふたをしてから隙間すきまを泥で埋め、床下に通気口を作ったこと。通気口の入口で薪を燃やすと熱気が床下を循環して中を温めぬくる仕様らしい。

言うならばアナログの床暖房。なんとも素晴らしい生活の知恵である。

少しずつ完成に近づいて行くその工程が、見ていてめちゃくちゃワクワクする。

動画の最後はお決まりの笑顔で横ビース。

うむ。次の更新が楽しみでしかたない。

……そうじゃねえだろ！ なにしてんだよ俺は！

これから朱莉がやってくるのに親父の動画を楽しんでる場合じゃねえだろ。

「あーもう！ 結局なんの解決もしてねえ！」

隣で丸まっていた源さんが俺の叫び声に驚いてビクツと身を震わせる。

「ああ……ごめんな源さん」

ソファアの上で右往左往する源さんを抱き上げて顔の前に持つてくる。

「源さん。俺たちの気ままな二人暮らしが終了の危機なんだ。なんかいい方法ない？」

源さんは鼻をヒクヒクさせながら首をかしげる。

そんな姿がとてつもなく可愛かわいいんだが、源さん相手に現実逃避しても仕方がない。

「どうしたもんか……」

その時だった——インターホンの音が彼女の到着を告げる。

「ただいま戻りました！」

俺が立ち上がるよりも先に、彼女が玄関を開けた。

言葉のとおり、まるで自分の部屋に帰ってきたかのようなフランクさ。もはや彼女の中で、この部屋は自分の部屋でもあるという認識なんだろう。

立ち上がり、彼女を出迎えるために玄関に向かう。

そこには、とても楽しそうに笑顔を浮かべる彼女の姿があった。

今日は暖かいからか、薄手の白い花柄のシャツに淡いピンクのフレアスカート。

この前のピンクのワンピースもよく似合っていたが、こういうコーディネートも悪くない。降ろした髪を少しだけ内側に巻いていて大人っぽく見えた。

「ただいま戻りましたって、どういう意味だ？」

「颯人^{はやと}さん、知らないですか？ 帰ってきたらただいまと言うのは当たり前のことですよ？

今までは一人暮らしをされていたので言うこともなかったと思いますが、これからは颯人^{はやと}さん
も言うてくさいね。ただいまって言える相手がいるって幸せなことですよ」

屈託^{くつたく}のない笑顔で口にするんだが……違う、そうじゃない。鈴木雅之が歌い出すぞ。

いや、ある意味で予想通りすぎる返答に突っ込む気すら起きない。

「まあ、とりあえず座りなよ」

どちらにせよ一度、しっかりと話をする必要がある。

俺はソファに座り、彼女にも隣に座るよう促した。

「失礼します」

彼女が腰を掛けると、俺はゆっくりと話し出した。

「改めてレンタル家族契約について話をしたいんですが」

「はい。私も颯人さんにお見せしたいものがあるんです」

「お見せしたいもの？」

彼女は鞆かばんから取り出したA4サイズの紙を差し出す。

受け取って確認すると、そこには『レンタル家族契約書』と書かれていた。

小難しい言葉で記された文言はともかく、内容を要約すると『高校卒業まで俺の身の回りの世話をするレンタル家族として一緒に過ごすこと』が詳細に記されている。

最後には、親父と彼女のサインと共に印が押されていた。

「冗談じゃないんだ……」

わかつてはいたことだが、思わずぼそりと呟つぶやく。

できれば冗談であって欲しいと思っていだが、こうして形として見せつけられると信じないわけにはいかない。

そして契約書には一つのルールと、いくつかの注意事項が記されていた。

『ルール① 家族が困っている時は、全力で、無償で、無条件で支えること。』

また、最初にお互い一つずつルールを決め、破った場合はペナルティを科すものとする。ペナルティ・相手のお願いを一つ、なんでも聞くこと。

追記・契約を反故^{ほご}とした場合、泉ヶ丘颯人の住んでいる部屋を解約することとする』

「ふざけんなクソ親父！」

とつさに契約書を破きそうになった。

なんだ最後の一文は！

部屋を解約!? ここを出て行けってことか!?

「そんなわけですので颯人さん。改めてお願いします」

彼女は三つ指について深々と頭を下げた。

そんな彼女を見下ろしながら、俺は納得する。

なるほどな……彼女の押しがやたらと強かったのも、レンタル家族契約を断られるとは微塵^{みじん}も思っていない発言が多かったのも、つまりはこういうことか。

あの親父なら、本当に部屋の解約をしかねない。

そうになったら、高校生の俺は自分で部屋を契約することができず路頭に迷うことになる。親父から受け取った纏^{まと}まった金は、おそらく俺が大学を出るまで充分な余力があるだろうけど、金があったところで未成年の俺には新しい部屋を契約することはできない。

瞬時に様々なケースを想定し、結果——受け入れざるを得ないと判断した。

「わかったよ……」

正直参った。冗談じゃない。

だが、もういつそポジティブに考えるべきだ。

——俺が理想とするお一人様生活を謳歌するための、長い人生のうちのたった二年。そう考えれば耐えられる。なにもこのふざけた状況が一生続くわけじゃない。

全ては、独身公務員として定年退職を迎えるという夢のために。

「こういうことなら仕方がない」

「ありがとうございます！」

彼女は嬉しそうに胸の前で手を合わせて笑顔を浮かべた。

「じゃあさっそくだけど、決めるべきことを決めてしまおう」

「はい！」

契約書にあったルールもそうだが、一緒に暮らすとなれば役割分担は必要だろう。

後からあれこれ採めるのは、正直面倒というものもある。

「お互いに一つずつルールを決めるってやつだけど……月夜野さんはなにかあるか？」

「朱莉と呼んでください」

「え？ それがルール？」

「いえ、ルールとは別です。家族なのに苗字で呼び合うのは変ですから」

「そりゃそうだけど……」

さすがに女の子を名前で呼ぶのは抵抗がある。

「ちなみに呼び捨てで結構です」

さらにハードルを上げてきやがった！

「じゃ、じゃあ……朱莉は、ルールどうする？」

ダメだダメだダメだ！

むずむずしすぎて耐えられん！

「そうですねえ……」

彼女は名前で呼ばれ満足そうな表情を浮かべると、少し悩んだ素振りを見せる。

「実は二つ候補がありまして、どちらにするか決めかねています」

「二つ？ まあ、とりあえず言ってみれば？」

「一緒に寝るか、一緒にお風呂に入るか——」

「待て待て待て——！」

はい!? なに言っちゃってんの!? 正気か!?

いや、待つのは俺だ。

落ち着け。冗談という可能性もある。

真面目な印象とは裏腹に、じつはめっちゃお茶目とか——。

「このお部屋の寝室は一つだけですし、それに本来、家族というのは一緒に寝るものです。よく親子川の字になってというじゃないですか。でも、ガス代や水道代を考えれば一緒にお風呂に入る方が節約になりますし、家族のコミュニケーションにもなるかなと……」

……そんな可能性はなかった。

やはり真面目な印象通り、マジで言っているようにしか見えない。

どうなんだろうか? 俺はまともな家族生活を送ってこなかったからわからない。

母親は物心がついてすぐに亡くなったし、父親はいつも仕事で帰りが遅かった。それは仕方がないことだと思っているし、別に自分が人より不幸だとは全く思っていない。

むしろ小さな頃から自分で料理や掃除なんかをしていたこともあり、そのおかげで一人暮らしに必要な家事スキルが身についたことについては良かったとすら思っている。

だが、そのせいで朱莉の言う『普通の家族』というものがわからず判断できない。

「どうでしょう? ベッドは別にして、私がこのソファで寝かせていただくという方法も

ありますよね。そう考えますと、やっぱり私のルールは一緒にお風呂に入——」

「俺のルールは風呂だけは別にするってことにしてくれ！」

朱莉の言葉を遮って、こちらのルールを先に提示した。

「……ずるい」

膨れっ面でジト目を向けられた。

「いや……仮に朱莉の言うとおり家族は一緒に風呂に入るものだとしても、やっぱりいい年の男と女と一緒に風呂入るってまずいだろ。家族とはいえ契約で、やっぱり他人だしさ」

そう言うと、朱莉は少しだけ残念そうな表情を見せた。

「わかりました。では、私のルールは寝る時は一緒にベッドにします」

先ほどまでの拗ねた感じはどこへやら、機嫌良さそうに口にした。

なんだろうか……なんだかしてやられた気がする。

俺のルールは結局のところ、危機回避で決めさせられたようなもの。朱莉としては希望の二択のうち一つがルールになったわけで……まさか初めからこうなるように仕向けた？

朱莉の様子を窺うと、鼻歌混じりに契約書をしまっている。

いや、どちらかといえば策を講じるタイプよりも天然だろう。

考えすぎか……。

「添い寝……ふひひっ」

「え？」

そんなことを考えていると、朱莉がなにか呟いたような気がした。

「今……なにか言ったか？」

「え？ なにがでしよう？」

朱莉は至って真顔でそう答える。

空耳か？　なんか凄くゲスい笑いが聞こえた気がしたが……。

「いや。なんでもない……」

やっぱり気のせいらしい。

「初期ルールも三つ決まったわけだし、後は生活していく中でなにか支障があれば、その都度話し合うってことでいいか？」

「そうですね。そうしましょう」

「それとな、もう一つ話しておきたいことがあるんだが——」

それは、レンタル家族契約を続ける上でとても大切なこと。

「改めてこのことは、学校やクラスメイトには秘密にしてもらいたいいもしバレたら、想像できるあらゆる最悪のことが起こるだろう。」

「はい。もちろん私も、他の方にお話しするつもりはありません」

「学校では必要以上の干渉は避けてくれると助かる」

「わかりました。颯人さんのご都合の良い形で構いません」

「悪いな。助かるよ」

後は自分たちがぼろを出さなければ、少なくとも週末以外は今までどおり。常に細心の注意は必要だろうが、最低限のお一人様生活は維持できそうだ。

「こうして秘密を共有しあうと、家族って感じがしますね！」

朱莉は楽しそうに言うんだが、俺にはそんな余裕はない。

むしろ秘密という名の弱みを握られたようにしか思えない。

「さて、決めることも決めましたし、今からデートをしましょう」

「デ、デート!?!」

あまりにも突拍子もない提案に思わず声が裏返った。

「はい。必要な物を買ひ揃えたいですし、この街のことをいろいろ知っておきたいんです」

「ああ、買い物に付き合えてことね。家族として荷物持ちくらいは付き合おうさ」

「こんな時ばかり家族と言うんですね。やっぱりずるいです」

「悪いな。一人暮らしが長くなると多少のずるさは必要なのさ」

適当に返すと、朱莉は少し寂しそうな表情を浮かべた。

ああ、そうか——俺は今、氣を遣わせてしまったんだな。

普通の家庭ですごしてきた奴から見れば、一人で生きてきた奴は可哀想——かわいそう——そういう風に

捉^{とら}えても仕方がない。まだ俺に友達がいた頃、同じようなりアクションをされたこともある。今後は冗談でもこの手の発言は控えよう。

残念ながら、俺には可愛い女の子を困らせて喜ぶ趣味はない。

「じゃあ今から行くか。源さん、留守番よろしくな」

「源さん、行つてきますね」

源さんに挨拶^{あいさつ}をする俺に続いて朱莉は源さんに手を振る。

こうして、レンタル家族初日の買い物へ出発した。

部屋を出た俺たちは、近くのバス停でバスがくるのを待っていた。

土曜日の午前中ということもあり、待っているのは俺たちだけ。

「どこに行くんです?」

「駅の西側にある商店街に行こうと思ってる。田舎^{いなか}の商店街なんてニュースじゃどこもシャッター街って言われてるが、この街の商店街は意外と活気があるんだ。個人商店だけじゃなくてチェーン店やドラッグストアなんかを誘致することで、寂れないようにしてるらしい」

「そうなんですな」

「そう遠くないところにショッピングモールもあるんだが……そこは学生たちがこぞって集ま

るから、一緒に出掛ける時は避けた方がいいだろ。クラスメイトに会う確率が高すぎる」

「そうですね。今度一人の時に行ってみます」

「ぜひ行ってみるといい。アパレル系のテナントも多いから、なにをするにも困らないぞ」
そんな会話をしていると、すぐにバスがやってきた。

朱莉と一緒に乗り込み、揺られること十五分——駅の東口に到着した。

「ここから歩いて十五分てとこかな。少し歩くが大丈夫か？」

「はい。街並みも見えたかったので、むしろ嬉しいです」

それからしばらく会話もほどほどに歩き続ける。

朱莉は時折、きよろきよろしながら辺りを見回していた。

新しい環境に対する不安よりも、好奇心が勝っている。そんな印象を受ける。

知り合って一週間だが、朱莉は裏表がない女の子なんだろうと思う。初対面の男に対してグイグイきたり、自分の意見をはっきりと言う時もあれば、気を使える一面も見せる。

他のクラスメイトのような派手さや幼さは感じられず、どこか大人びていた。

先日も感じたことだが、きっと育ちが良いんだろう。

だが、俺が知っているのはそれだけだ。

朱莉が今までどこでどんな生活をしていて、どうして転校してきたのか？　そもそもなぜレンタル家族なんて仕事を受けるに至ったのか？　知らないことが多すぎる。

でも、それらを詮索するのはやめよう。

それらの事情が、おそらく特殊だというのは想像に容易いが、朱莉の問題だ。

自分から言つてこない限り無暗に聞く必要はない。あくまで契約としての家族関係。知る必要があるとしたら、きつと朱莉から話してくるだろう。

ただ思うのは、正直ほつとしている自分がいる。

レンタル家族の相手が金髪ギャルで『マジ丑!』とか言つてたら会話にならない。そんなことを言う奴は十年後に思い出して恥ずかしさのあまり自ら掘った穴に落ちてしまえ。

「颯人さん！ 川が流れています！」

朱莉は渡っている橋の中央で柵に掴まりながら下流に目を向ける。

「そんな珍しいものか？」

「私の住んでいた街もたくさん川があつたので、つい嬉しくて」

「この街はそれなりに栄えてるが、少し離れるだけで一気に田舎だからな。川なんていくらでもあるぞ。夏になるとリア充どもがあちこちの川辺でバーベキューやつてるし」

「そうなんですか？ 楽しそうですね！」

「朱莉ならそういう友達もたくさん作れるだろ」

「私はお友達とはなくて、颯人さんと一緒にやれたらと思ったんです」

「なっ……」

「夏になったらやりましょうね。バーベキュー」

「……考えておくよ」

本当、朱莉はこの手のことをストレートに言ってくるんだが、どこまで本気で言っているんだ？ 社交辞令か、家族としてか、はたまた……うん。それはないな。

お一人様理論その① 人に期待せず、期待されず。当然勘違いもしない。

俺みたいに孤独を愛する者は普段、屋上なんかの人気のないところで活動するんだが、そうすると色ボケした男女の告白シーンなんかを見たくもないのに目にしてしまう。

少し仲良くなつて『俺たち両想いじゃね？』なんて勘違いして告白をしたものの『あ……ごめん。そういうつもりじゃなくて……』なんて、お決まりのハートブレイク。

その後、クラスで暴露されて恥ずかしい思いをした先人たちは数知れず。いつの時代も繰り広げられてきた悲しい青春の一ページ。告白なんてするんじゃないかな……。

つまり、朱莉が誘ってくれるのは家族としてのイベントの一つだからだろう。

焼肉店でもファミレスでも一人の俺が、家族ってだけでこんな美少女と肉が食えるとは。

どうでもいいけど外食するたびに店員に『何名様ですか？』って聞かれるんだが『どう見たつてお一人様だろこのヤロウ！』って思うのはきつと俺だけじゃないはず。

なんてバカなことを考えていると、目的の場所に辿りついた。

「さ、見えてきたぞ」

商店街のアーケードを指差すと、朱莉はぱつと顔をほころばせて俺の手を引く。

「早く行きましょう！」

「ちよっ——」

こうして手を繋ぐのは三度目。

いい加減、心臓に悪いからやめて欲しい。

商店街に着くと、土曜日だけあって多くの人が歩いていた。

この商店街は通称シリウス通りと呼ばれていて、全長は約五百メートルにわたる。

その全てがアーケードに覆われていて、^{おお}天気を気にせず買い物ができることもあり昔から市内の人気スポットの一つとして認知されている。

その辺の商業施設と比べても引けを取らない店舗数を構え、特に主婦や家族連れに人気がある場所だが、近年は若者を呼び込もうと人気チェーン店などの誘致に力を入れている。

一応念のため、知り合いがいなか辺りを見回した時だった。

「ん——？」

一瞬、少し離れた電柱の辺りに人影が見えたような気がした。

しばらく様子を窺うが、^{うかが}特に変わったところはない。

「気のせいかな……」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない。それで、まずはなにを見たいんだ？」

「お風呂用品とお部屋着が見たいです。後は適当にお店を見て、欲しい物があれば」

「わかった。じゃあまずはドラッグストアかな」

商店街にはいくつかのドラッグストアがあるが、一番近い店に足を運ぶ。

朱莉はシャンプーとコンディショナー、ボディソープなど迷わず手に取る。普段から使っているものなんだろう。詰め替え用も合わせて買うあたりしつかりしてる。

他にも化粧品コーナーでいくつか物色。

会計を済ませて店を出ると、次に向かったのは某アパレルチェーン店。

ローコストとバリエーションに富んだ品揃えで若い世代から支持されている店。男性物よりも女性物を中心に扱っていることもあり、午前中から多くの女性がいた。

「颯人さんは、女性のお部屋着の好みとがあります？」

「いや……特には」

部屋着の好みってなんだよ。

下着の好みなら大いにありだが、部屋着なんて初めて聞いたぞ。

「では、好きな色は何色ですか？」

「俺の好みに合わせようとしてるなら気にしなくていいぞ」

「気にします。一緒に暮らすのですから、相手に合わせることも大切です」

言っていることはごもつともなんだが、たぶん合わせる努力の方向性が違う。

そういうのはこう、生活スタイルとか食事の好みとかじゃないだろうか？

朱莉は俺をじっと見つめながら返事を待つ。

ああ……答えないって選択肢はないんだな。

「そうだなあ……前に着てたピンクのワンピースは似合ってたんじゃないか」

「え……」

無難に返したつもりが、朱莉は少し驚いた様子で頬を染めた。

「ありがとうございます。今日もあのワンピースの方が良かったですか？」

「いや、今日の服も似合ってるから気にするな」

すると一瞬だけ、もの凄く顔がだらしなく崩れた気がした。

衝撃のあまり思わず目をこすって二度見するが、いつもの笑顔だった。

気のせいかな……さっきの人影といい疲れてんのかな……。

「では、部屋着はピンクにしようと思います。いえ、部屋着だけではなく今日買うものは全部ピンクで統一しようと思います。そうします」

「やめてくれ。俺の部屋が一気にメルヘンっぽくなっちゃうだろ」

「決定事項です。諦めてください」
あきらめ

すると本当に部屋着だけじゃなくタオルや靴下やスリッパなど、全てピンクで揃え始める。ちなみに本人は隠していたつもりだろうけど、下着もピンクのレースだった。

まあ……下着がピンクのレースは悪くない。

「颯人さんはなにか買うものはないのですか？」

「特にないな」

「ではせっかいですから、二人の新しい生活をお祝いしてなにかプレゼントします！」

「いや、悪いからいいよ」

「遠慮なさらないでください。私が差し上げたいんです！」

笑顔を向けて思いつきり詰め寄ってくる。

押しが強すぎる……また答えないとダメなパターンだ。

「じゃあ朱莉が選んでくれよ」

「いいのですか？」

「ああ。プレゼントするのは贈る側が選ぶものだろ？」

「わかりました。任せてください！」

朱莉は気合の入った表情を浮かべながら、男性物のコーナーへ向かう。

俺はその後に付いて行きながら考える――。

朱莉がプレゼントをしてくれるなら、俺もなにか返さなくちゃだよな。不本意だとしても二人の生活の記念というのなら、貰い^{もら}っぱなしというわけにもいかない。

お一人様生活をしていて誰かに物をあげるなんて機会はなかったから、なにをあげていいのかわからん。街行くカップルどもに心の中で爆弾のプレゼントなら毎日してるが。

困ったな……。

「これにします！」

朱莉が声高らかに差し出したものを見て目を疑った。

「……ボクサーパンツ？」

「はい！」

これしかないと言わんばかりのドヤ顔だった。

そんなドヤ顔ですら可愛いが、なぜそれを選んだ……。

「見た瞬間これしかないと思いました！」

自信満々の柄は、なんとピンク地ベースのさくらんぼ柄。

さっきの宣言どおり、本当に今日はピンク以外を買わないつもりか？

それとも暗に、俺がチェリーボーイだと言いたいんだろうか？

まあ、そうだけどさ。

「ほ、他に選択肢はないのか？」

「違う柄の方が良かったでしょうか？」

「柄の話じゃない！ パンツ以外はないのかって言ってんだよ！」

思わず大声を出してしまい、周りの女性客が一気に視線を向けてくる。

『あらあら、彼女からのプレゼントかしら？』『最近の高校生はカップルで下着を買いにくるのね』『今晚はその下着でなにをするつもりかしらウフフ？』『リア充死ね』

一部の嫉妬しつとに満ちたコメントはさておき、お姉様方が微笑ましい視線を向けてくる。

耐えられん！ なんだこの羞恥しゅうちプレイは！

「颯人さんがこの下着を穿はいている姿を想像するだけで……ぬふふっ」

「わかった！ もうこれでいいからさっさと会計を済ませて出よう！」

朱莉がちよつと言葉で形容し難い表情がたをしていたような気がしたが、それどころじゃない。慌てて朱莉の腕を掴んでレジへ直行する。

まあ、この前パンツが一枚なくなっていたし、ありがたく貰っておこう。

そう無理やりポジティブに考えながら、二軒目での買い物は終わった。

お昼すぎ、腹が空いた俺たちは休憩も兼ねて近くの Pasta 屋へ入った。

商店街の一角にあるこの店は古くからある Pasta 屋で、昔から夫婦二人で切り盛りをしてい

る。洋風のレトロな建物で、どことなく雰囲気のある人気店。

夫婦が飼っている老猫がお客を出迎えてくれるのも人気の一つで、お客さんが来ると小さく鳴いて知らせるため、ドアに來客を知らせる鈴を付ける必要がないらしい。

中学までは友達とよく来ていたが、一人で入るにはハードルが高く久しぶりだった。

「いいお店ですね」

朱莉は氣に入ったらしく、店内を興味深そうに見渡している。

すぐにウェイターが注文を取りに来てくれて、俺はベーコンとほうれん草のパスタを、朱莉はカルボナーラと飲み物を頼んだ。

しばらくして注文した品が運ばれてくると、朱莉は目を輝かせながら口に運ぶ。

「美味^{おい}しいです！」

「そいつは良かった」

それから俺たちはゆっくりと昼食を味わった。

「そう言えば、役割についてなんだが」

食べ終わった頃、食事のことで思い立ち朱莉に話しかける。

「晩飯の用意はどうする？ どちらかの負担になっても悪いし交互に作るか？」

そう提案すると、朱莉の顔からフツと笑顔が消えた。

あれ？ 俺なんか変なこと言ったか？

「お料理……ですか」

なんだか思い詰めたような声で呟く。

なんだろう。一気に場の空気が重くなった気がするとか……。

踏んじやいけない地雷を思いつき踏み抜いたような予感。

「できれば、お料理を作るのは遠慮させていただきたいです……」

「苦手なのか？ それなら俺が作るよ。掃除も洗濯もしてもらってるしな」と朱莉は、少し悩んだような素振りを見せて話し始めた。

「苦手と言いますか、刃物を持つことに少し抵抗がありました」

「抵抗？ 怖いとか？」

「どちらかと言いますと、怖いのは私ではなく周りの方と言いますか……」
思わず首を傾^かげてしまった。

伝わらないのがわかったのか、朱莉は続ける。

「その……私、刃物を持っている時のことをあまり憶えていないのです」とんでもない告白だった。

「き、記憶がないってことか……？」

「はい。ずっと前に、家族に料理を振る舞おうとしたことがあったのですが、気が付いた時にはベッドで横になって……それ以来、刃物を持たせてもらえないのです。大好きだったお

ばあちゃんの最後の言葉で、朱莉は包丁だけは持つちゃいけないと言われて……」

「そ、そうか。わかった。まあ外食でもいいしな」

「ありがとうございます」

思いつきりバイオレンスな予感しかないんだが……。

とりあえず、おばあちゃんの遺言だけは守ろうと誓った。

その後、俺たちは飲み物を片手に気ままに商店街を見て回る。

朱莉は時折、物珍しそうにお店のウィンドウを眺めては楽しそうにしていたが、適当に買い物をしているうちに気が付けば時間は夕方の四時すぎ。

「結構いい時間になったな」

「そうですね」

「少し早いが、そろそろ帰るか。家のこともやらなくちゃだしな」

「あの——」

俺がそう提案すると、朱莉がなにか言いたそうにしている。

「この辺に、城址公園じょうしこうえんがありませんでしたか？」

「城址公園？ ああ……あるけど、知ってるのか？」

「実は昔……小さな頃なのですが、何度かこの街に来たことがあるんです。その時に桜を見きた記憶があつて、確かこの辺りだったと思うのです」

朱莉は懐かしそうに口にする。

その姿は、どこか憂いさえ帯びていた。

「……少し歩くけど行ってみるか？ 桜もちょうど見頃みころだと思ふぞ」

「いいのですか？」

「ああ。俺も久しぶりに行ってみたい」

「ありがとうございます」

笑顔を浮かべる朱莉を連れて、城址公園へと向かう。

それから十五分ほど歩くと、視界には城址公園のシンボルである城と桜が見え始めた。周りはお堀に囲まれていて、正面の橋を渡って中に入る。中には整備がされた敷地が広がっていて、中央の広場をぐるりと囲むように無数の桜の木が立ち並んでいた。

「わあ……」

朱莉は桜を眺めながら、感嘆の声を上げた。

「ここで合ってたか？」

「はい……ここです」

朱莉は小走りで広場の中央へと向かい、辺りをぐるりと見渡す。

俺も少し遅れて朱莉に歩み寄る。

「ここの桜はいくつか種類があるんだ。二月下旬から開花する河津桜と、三月下旬に開花するソメイヨシノ。その後に咲く大山桜ってのがあって、結構長期にわたって楽しめるんだ」

朱莉は無言で桜を見つめていた。

説明が聞こえていなかったのかと思ひ朱莉の顔を覗く。のぞ

すると、瞳が僅かに涙でにじんできているように見えた。ひとみ わず

もしかしたら、沈みかけの夕日がそう見せたのかもしれない。

俺たちはしばらくの間、黙って美しい桜を眺め続けた。

「連れてきてくださって、ありがとうございます」

どれくらいの時間だっただろうか？

不意に朱莉がそう口にして、俺に視線を向けてくる。

「気にするな。小さい頃は毎年家族で花見に来ていたことを思い出した。おかげで俺も懐かしい気持ちに浸れたよ。たまにはこういうのも悪くないかもな」

朱莉が現れなければ、きっとこんな機会もなかっただろう。

「最後に来たのはいつだったかな。母さんがまだ生きていた頃だから――」

思わず言いかけて、口を噤む。つぶく

「……快斗さんから、伺っています」

「……そっか」

そりゃそうか。レンタル家族の契約は俺の世話をするため。一人暮らしの男子高校生の世話となれば、母親はどうしたんだって話になるだろう。

別に隠すことでもない。

「母さんが亡くなったのは十年前——その時のことは正直、あんまり憶えてない。その後の親父との二人暮らしが大変だったことの方が憶えてるくらいさ。今はあんな親父だけど、当時は外資系企業で仕事をバリバリこなすエリートサラリーマンだったらしい。母さんが亡くなってからも親父は仕事が忙しくてな、あんまり家族らしい生活はしてこなかった」

朱莉は黙って俺の話に耳を傾けている。

「だからって、別に親父に対して思うところはない。おかげで一人で生きていく術はそれなりに身についた。最低限、父親らしいことはしてもらったし感謝してるくらいさ」

「今の話を快斗さんが聞いたら、きっと喜ぶと思います」

「いやいや、ないだろ。好きに生きたくて山籠もりするような親父だぜ？」

そう言って笑って見せるが、朱莉は真剣な表情をしていた。

「悪い。しみりさせちまったな。帰ろうぜ」

いつ以来だろうか？ こうして自分のことを誰かに話すのは。

中学時代、まだ自分に友達と呼べる存在がいた頃、親友と呼べる仲間がいた頃ですら滅多に

話さなかったことだ。話そうとすら思わなかったこと。

それを出会って一週間の女の子に話すなんてどうかしてる。

自分らしくない——そんなことを思いながら帰路についた。

*

家に着いたのは六時すぎだった。

帰り道、今日の晩飯は買って食べようという話になり、俺は近くのお弁当屋さんに向かい、部屋の掃除をしてくれるという朱莉には、鍵^{かぎ}を渡して先に帰ってもらった。

俺はから揚げ弁当、朱莉の分はハンバーグ弁当を買い足早に部屋に戻る。

「ただいまー」

ただいまなんて口にするのはいつ以来だろうか？

ちよつとばかり照れくさくなりながら部屋に入ると。

「……あれ？」

先に帰っているはずの朱莉の返事がない。

おかしいなと思いながら部屋に足を踏み入れた時だった。

「……なにしてんだ？」

思わずそんな言葉を掛けずにはいられない。

朱莉はクローゼットに頭を突っ込み、お尻しりだけこちらに向けていた。

「は、颯人さん——!？」

朱莉は慌てて頭を出してクローゼットを閉める。

「クローゼットの中も埃ほこりが溜ためまっていたので掃除をしていました」

まるで何事もなかったかのような笑顔でそう言った。

あまりにも笑顔が眩まぶしすぎて目を逸よらしたくなる。

「そうか……そんなとこまでやってもらって悪いな」

「いえいえ。これもレンタル家族としてのお仕事ですから」

てつきり俺の部屋を漁さぐっていたのかと疑うってしまうところだったが、頼むからそこだけはやめてくれ。俺の秘蔵コレクションの隠し場所なんだが……バレてないよな？

そんなことを思いながら弁当と荷物を置き、思わずソファに崩れ落ちる。

座った瞬間、それまで感じていなかった疲れが押し寄せてきた。

「ふう……」

「お疲れ様です。荷物を全部持っていたいてありがとうございます」

「ああ、気にするな……」

たぶん、この疲れは荷物を持っていたからじゃない。

この一年間、こんなに長時間外出をすることはなかった。一人の時は買い物なんて必要最低限だったし、用事が済めば即帰宅。しかも可愛い女の子と二人きりなんて初めて。

さらには、女の子に下着を買ってもらうという、とんだ羞恥プレイに晒さらされてしまったせいだろう。

……確実に気疲れだろこれ。

「お弁当を食べます？ それとも先にお風呂に入りますか？」
荷物を片付けた朱莉が部屋に戻ってきて口にする。

「あー……そうだな。先に風呂に入ろうかなあ」

風呂に入ればこの疲れも少しはマシになるだろう。

「もうお湯を張り始めています。すぐに溜まると思いますよ」
「準備がいいな。じゃあ入ってくるわ」

なんとか重い腰を上げる。

「着替えて下着は洗面所に置いておきましたから」

「なにからなにまで悪いな。ありがとう」

そう告げ、俺は洗面所へと向かった。

「はああああ……」

風呂に入り、さっそく頭を洗いながら思わず声が漏れた。

風呂は心の洗濯とはよく言ったもので、一日の気疲れが吹き飛ぶようだとはいえ、これから毎週末これが続くのかと思うとやはり気は重い。

いや、今は考えるのをやめよう。

風呂の時からいはい——。

「失礼します」

「うおおおい!？」

いきなり風呂のドアが開き、誰かが入ってきた。

いや誰かって朱莉しかないんだが、頭を洗ってる最中で目が開けられない。

「なに入ってきてんだよ!」

「お背中を流しに参りました」

「はあ!? いやいやいや、風呂は別って決めただろ!」

「安心してください。お背中を流しにきただけで一緒に入っているわけではありません。どちらかといえばそれを口実に覗きにきたようなもの。ルール外のぎりぎりセーフラインです」

「ぎりぎりセーフじゃねえよ! 覗きもアウトだよ! なんだその謎理論^{なぞ}は!」

「これも一つの家族の形。では、失礼します」

「待て待て待てくれ！ こっちは裸なんだ、せめて隠すものを！」

「安心してください。私も裸です」

「は……？」

嘘うそだろ……？

……マジで？

「嘘です」

嘘なのかよ！

一瞬期待しちゃっただろうが！

「安心してください。水着です」

水着!? ワンピースかビキニか!?

いや、この際どちらでも——。

「嘘です。普通に服を着ています」

「なんでそんな残酷な嘘を吐くんだ！」

さすがに心の声かんべきが漏れるだろうが！

「それこそ完璧かんぺきにルール違反です。私としては、ルールを破ったら颯人さんが私にどんなお願いをするのか興味があるので、いつそルールを破ってしまいたいくらいですが信頼関係って大切ですよね。ここはぐつと堪え、ルールを守ろうと思います」

「信頼関係を大切にするなら今すぐ出て行ってくれ……」

「では、覚悟を決めてくださいね！」

朱莉は制止も聞かず、鼻歌混じりに俺の全身をくまなく洗ってくれたのだった。頼むから前だけはやめてくださいお願いします。

「全くもって休まらなかった……むしろ余計に疲れた……」

俺が風呂を出ると、今度は朱莉が風呂に入って行った。

入りがけに『私は颯人さんがルールを破っても全く気にしません。家族としてのスキンシップがしたくなったらいつでもどうぞ』と言っていたが、どこまで本気なんだろうか……。

朱莉にしてみたら一緒に風呂に入るのをルールにしようとしていたわけだから、仮に俺が自制心を失って突撃しても、言葉のとおり気にはしない可能性が高いだろう。

いきなりルールが機能していないんだが……風呂覗いていいとか女神かよ。なんてことを考えながら、風呂上がりにも拘らず放心状態。

「家族って大変なんだなあ……」

本当、しみじみと実感してしまう。

一般的な家族ってやつは毎日こんなハードなイベントをこなしているのか？

確認したいが、幸か不幸か、俺にはそんなことを聞ける友達はいない。

もしこれが正しい家族のあり方なんだとしたら、家族大勢で暮らしている奴はそれだけで尊敬できる。お一人様生活を愛する俺には、ちょっと耐え切れそうにない。

そんなことを考えている時だった。不意に部屋のインターホンが鳴る。時計に目を向けると夜の七時すぎ。

「こんな時間に誰だ？」

そう思いながら重すぎる腰を上げ、玄関を開けた時だった――。

「うおっ――!？」

開いた隙間からギリリと光ったなにかが侵入し、とっさにかわす。

次の瞬間、ドアの隙間から手が伸び、思いつきりドアを開かれた。

数歩下がって正対すると、そこには裁ちばさみを持った小さな女の子の姿があった。

「だ、誰だおまえは……？」

女の子は瞳の奥に殺意を込めてこちらを見据える。

明らかに異常者に恐怖を堪^{こた}えて声を掛けた。

「……んで」

「なに？」

「死んで……死んでくれないのなら、せめて切り落としてやる！」



「どの部位をだよ——！」

真^まっ直^すぐ向^むかつてくるはさみを右にかわして相手の手首を掴む。

そのまま腕を引き、バランスを崩したところで足を掛けると相手は盛大に転んだ。床に突っ伏す女の子に馬乗りになり、身動きが取れないように拘束する。

「どこの誰だか知らないが、とりあえず縛らせてもらうぞ」

床に押さえつけたまま、女の子が手にしていたはさみを奪^{あは}う。

首からかけてあったバスタオルをはさみで二つに裂き、暴^{あは}れる女の子の手足を縛った。それでも女の子は、反り返ったエビのように跳ねて抵抗の姿勢を見せる。

「解^{ほど}け！ この変態！」

「変態はどっちだ。いきなり不法侵入してきてはさみで切りつけるとか猟奇的すぎんだろ」

「いいから解^{ほど}けこのバカ！ アホ！ 切り落とすぞ童貞！」

童貞はあっているが。だからどこの部位をだよ。

そんなことを思う程度に冷静さを取り戻した俺は、女の子を抱えて部屋へと放り込む。

改めて不法侵入者がどんな奴か顔を覗き込んでみると、まるで捕^{のらいぬ}まった野良犬のようなギラギラした目で俺を睨^{にら}んではいるが、よく見ればとても可愛らしい顔をしていた。

髪は短いながらに柔らかそうでふわふわしていて、幼いながら整った顔立ちに下がり目の瞳と長いまつ毛が印象的。こうして睨^{にら}んでなければ愛嬌^{あいきょう}のある顔だろう。

どこか見覚えがあるような気もするが気のせいだろうか？

仕方がない。スマホを片手に警察へ通報しようとした時だった。

「とてもいいお湯でした……」

「ぶはっ！」

声が聞こえて振り返ると、そこにはお風呂上がりの朱莉の姿。

だがとんでもないことに、その体を覆うのは小さめのバスタオル一枚だけだった。

「なんで部屋着を着てこないんだ！ 今日買ったばかりだよ！」

「お風呂上がりは暑くて……すぐに服なんて着られないですよ」

どこかぼーっとした様子で顔を火照らせながら口にする。

「だからってそんな格好で出てこられても困るだよ！」

「減るものじゃないですし遠慮なくご覧ください。家族なんですから」

家族がどうかの問題じゃなく、さすがに目のやり場に困る。

なんていうか、スタイル良いんだよ……すらっとしていて、出るとこ出ていて、それ

でバスタオルだろ？ 体のラインがもろな上に紅潮していて色っぽすぎる。

くそ……俺の中の天使と悪魔がノーガードで殴り合いの喧嘩けんかをしている。

お一人様とはいえ俺だって健全な高校生。悪魔が勝利しかけた時だった。

「お、お姉ちゃん……」

すると、縛り上げていた女の子が口にした単語に、悪魔が驚きのあまり手をとめた。そこを見逃さず、チャンスとばかりに天使が渾身のアップで勝利したのだが。

「え—— 雫!？」

見つめ合う二人。

「最悪だ……」

状況を理解し、思わず頭を抱える。

「そんな……この男もお風呂上がりで、お姉ちゃんもお風呂上がりなんて……すでに事後のことなの!? 事後でしょ! 事後なのね! いやあああああ! お姉ちゃんの処女が! 私が貰うはずだったお姉ちゃんの処女があああああああああああああああああああ!」

「事後じゃねえよ! いいから黙れこの変態!」

思わず少女の頭をひっぱたいて叫ぶ。

「やっぱり殺す! それがダメならせめてあんたの股間を切り落とさせて!」

「切り落とすってそこかよ!」

股間の危険を感じる俺と、驚きに言葉を無くす朱莉。

不法侵入者は、朱莉の妹だったらしい。

この姉妹はどうなってるんだ……ああもう、今日は本当に散々だ。

「で、この変態かつ不法侵入者は、朱莉の妹で間違いないんだな？」

「はい……申し訳ありません。妹の雫がご迷惑をおかけしました」

エビ反っている妹の隣で、ピンクの部屋着を着た姉は土下座をしている。

「一歩間違えればシャレじゃ済まなかったかもしれない」

「当たり前でしょ。本気で殺すつもりだったんだから」

「あなたはちよつと黙っていなさい」

朱莉は極寒のブリザードみたいな冷たい瞳と声音で妹を叱責する。

妹はなにかに怯^{おび}えるように、顔を青白くして黙り込んだ。

「颯人さん、お怪我^{けが}はありませんか？」

「大丈夫だ。とっさのこととはいえ女の子相手に失態を犯すほど間抜けじゃない。一人暮らしをしていると、いつでもどこでなにが起こるかわからないからな。最低限の心得はある」

そう口にする^{あんど}と、朱莉は安堵の溜め息を吐いた。

「妹の不始末は姉の責任です。颯人さんが望むのならなんでもします。言葉のとおり、仰^{おつしや}つていただければなんでも。今すぐ脱げと言われれば脱ぎますし、一生お世話をしろというのなら将来いい会社に入って養って差し上げます。専業主夫とかいかがでしょう!？」

おかしいな。

謝っているはずなのに、後半は嬉々^{きき}として提案してきたんだが。まさか朱莉はダメな男をヒモとして養いたい願望でもあるんだろうか？　ちよつと将来が心配だ。

「脱がなくていいし世話もしなくていい。専業主夫には興味が無い。そんな冗談はいいからとりあえず紹介してくれよ。妹じゃ警察に突き出すわけにもいかない。話くらい聞くら」

「あ……ありがとうございます！」

朱莉はまた全力で土下座した。

「雫。あなたも颯人さんに謝りなさい」

「ちっ……死ね童貞」

暴言を吐いた瞬間、朱莉が妹の頭をひっぱたいた。

「雫。次はありません。謝りなさい」

低音の感情のない声で朱莉が告げると、雫は震えながら。

「ゴメンナサイ……」

ロボットみたいに機械的ではあるが、一応謝られたことにしておこう。

「改めてご紹介いたします。この子は月夜野雫。私の妹です。年は二つ離れていて今は中学三年生。その……私が言うのもなんですが、私のことが大好きな重度のシスコンなんです」

うん。なんとなくそんな気はしていた。

「今は実家に住んでいるのですが、どうやら私を追ってきてしまったようです」

「そういうことか」

「この子には私の新しい住所も、颯人さんのことも話していなかったのですが……雫、どうしてここがわかったの？」

「お姉ちゃんのスマホの位置情報がわかるようにしておいたの。でもあれって微妙にずれたりするでしょ？ だからこの辺りを探したら、お姉ちゃんがこの男と部屋に入るところを見かけて……どうするか悩んだんだけど、お姉ちゃんになにかあってからじゃ遅いと思って」

「そういうことね……」

朱莉は納得しながら頭を抱える。

「結論、この男を殺してやろうと心に誓ったわ」

冗談に聞こえないからマジでやめてくれ。

やってることがストーカーにしか思えない。

「まったくこの子は……」

「だって心配だったんだもん。お姉ちゃん、私になにも言わずに急にいなくなっちゃうし、やっと思つたと思つたら男と一緒にいるし……」

半泣きで雫が訴えると、朱莉はそっと雫の頭に手を置く。

「黙って出て行ったことはごめんなさい。色々ばたついていて、後でゆっくり説明しようと思っていたの。心配かけて本当にごめんなさいね」

「ううう……お姉ちゃあゝん……」

朱莉が謝りながら頭を撫でてやると、雫は静かに泣き始めた。

「颯人さん。この子には後で私からきちんと言い聞かせます。どうか今回の件について許していただけないでしょうか？」

「そんな畏^{かしこ}まらなくていいって。事情がわかればそれでいい。要は妹が姉を心配してやってきたってことだろ？　そこで知らない男と一緒にいれば、心中穏やかじゃないのは想像できるしな。朱莉じゃないが、家族ってのはそういうもんなんじゃないか？」

ましてやシスコンなら、愛情表現が過剰でも仕方がない……ということにしておこう。

「ありがとうございます」

改めて、朱莉は深々と頭を下げた。

「雫、あなた今晚はどうするつもりだったの？」

「お姉ちゃんを見つけて一緒に帰るつもりだったけど、もし見つからなかったら明日も探そうと思ってホテル取ってある」

「そう。じゃあ今日はそこに帰りなさい。明日、私から連絡するわ」

「お姉ちゃんはどうするの？　この男の家に泊まるわけ？」

「そうよ。大丈夫、颯人さんは私がお風呂で背中を流しても手を出さない、とてもとても紳士的な人なの。残念だけど、バスタオル一枚で迫っても手を出さなかったでしょうね」

おかしい。全く誉められている気がしない。

むしろ男としてバカにされている気がする。

おいおい、俺が手を出さないからって舐めてもらっちゃ困るぜ朱莉さん。プロのぼっちはお一人様を貫くが故に、女の子との面倒なアレやコレを避けて通っているだけ。

その気になったらいつでも彼女なんて作れるし、童貞も容易に卒業できる。ただし然るべき場所でお姉様にお金を払う、頭に疑似が付く恋愛だけだな。

「あんた不能なの？」

「不能じゃねえよ！」

「じゃあアレな感じの人？」

「どっちも違うわ！　なんだその哀れみに満ちた瞳は！」

どっと疲れた。

もう疲れ切った……今すぐ寝たい。

「わかったら、もう帰りなさい」

「ん……わかった。気を付けてね、お姉ちゃん」

「うん。大丈夫よ。またね」

そんなやり取りをして、雫は朱莉に見送られて帰って行った。

去り際に『手を出したら次こそ切り落とす！』と言っていたが、たぶん幻聴だろう。

「なかなかぶっとんだ妹だったなあ……」

「手の掛かる子です。あの子の面倒はいつも私が見ていたのですが、少し甘やかしすぎたみたいですよ。そのせいで、あのようになってしまっ……」

「いいんじゃないの。姉妹仲が良いのは悪いことじゃないだろ」

「はい」

時計に目を向けると時間は八時すぎ。

「まだ早いが、なんだか今日は疲れた……早めに寝たい」

「そうですね。では晩ご飯を食べて早くに寝ましょう」

俺たちは買ってきた弁当に手を付け始める。

それからしばらく箸を進めると、近所でパトカーのサイレンが聞こえた。その直後だった。また部屋のインターホンが鳴る。

「ん？ 雫が戻ってきたか？」

忘れ物でもしたのか？

そう思いながら玄関を開けると、そこには二人のお巡りさんの姿。

「な、なんすか……？」

「先ほど、こちらに女子高生が拉致監禁されていると通報がありました」

「……はい？」

「少々中を確認させていただきます！」

部屋に上がり込むお巡りさん。

瞬間、なにが起きているか理解した。

あのクソガキ！ 警察に通報しやがったな！

それからは大変だった。

疑いの眼差^{まなざ}しで聴取される俺と朱莉。レンタル家族だと説明したところで理解してもらえは
ずもなく、とりあえず同じ学校のクラスメイトであり、拉致監禁ではないと訴える。

お巡りさんたちも困っていたが、事件性がないとわかると帰っていた。

帰りがけ『高校生でも彼女いるのに僕なんて二十四年間彼女なしっすよ……』『上には上がい
るから気を落とすな。俺は三十年だ』『先輩、魔法使えるんすか!?』『俺は素人童貞^{しょうてい}だから魔法は
使えないんだ……』うん。この国の警察官は大丈夫だろうか？

二人が悲しみに包まれながら帰った後、疲弊^{へい}しきった俺たちはソファでうな垂れる。

「朱莉……マジで妹のこと、なんとかしてくれ」

「はい……本当に申し訳ありません」

「……寝るか」

「寝ましよう……」

そう言って寝室に移動したんだが。

この時、俺はとんでもないことを忘れていたことに気付く。
そうだ——寝る時は一緒のベッドだった。

全身から嫌な汗がぶわっと噴き出る。

「颯人さんは奥と手前、どちらがいいですか」

「いや……別にどちらでも」

「では私が奥で寝ますね。お先に失礼します」

朱莉は平然と口にして、ベッドに横になって布団ふとんを掛ける。

マジか……この狭いベッドで、これから一緒に寝ると？

「颯人さん、どうかされましたか？」

「あ、いや……うん」

朱莉は布団を持ち上げ、おいでと言わんばかりに手招きをする。

「し、失礼します……」

なんとか隣で横になったものの、全く落ち着かない。

風呂上がりのせいかな、朱莉からはシャンプーのいい匂いにおが漂ってくるし、微妙に肩が触れ

ていて妙に感触を意識してしまふ。静かになると心音が聞こえそうになるほど。

やばい。この状況はやバすぎる。股間の紳士がマーベラス。

「電気、消しますね」

「お、お願いします」

寝室が暗闇くらやみと静寂に包まれる。

緊張のあまり全く寝られずにいると、朱莉がふと呟いた。

「颯人さん。今日はとても楽しかったです」

「そ、そうか。それは良かった」

「不束者ふつつかですが、よろしくお願いしますね」

「こ、こちらこそ……」

しばらくすると、朱莉の寝息が聞こえ始めた。

この状況で普通に寝られるとかマジかよ……いっそ不能であればどれだけ楽か。
結局この日は、朝方まで眠ることができなかった。

*

翌日、俺が起きると時間は十時。

すでに朱莉は起きていて、着替えや化粧も済ませていた。

それどころか洗濯も済ませてくれたらしく、既にランダに干してあった。

「今日は雫のこともあるのでこれで失礼しますね。来週からはもっとゆつくりできると思いま

す」

「わかった。雪にはくれぐれもよろしく頼むよ……マジで」

「はい。任せてください」

笑顔でそう答えると、朱莉は小さく手を振って部屋を後にした。

「さてと、昨日の洗濯物でも取り込んでおくか」

ベランダへ行き洗濯物を取り込もうとすると、まだ微妙に生乾きだった。

今日は天気もいいし、もう少し干しておけば乾くだろう——そう思った時だった。

「あれ……？」

おかしい。昨日穿いていたパンツがない。

昨日、俺が風呂に入っている間に朱莉は洗濯機を回してくれた。間違はなく洗濯機に入れた記憶はあるし、一緒に洗濯をしているはずで、ここに干してなければおかしい。

洗濯籠から移す時に漏れてしまったんだだろうか？

洗面所に行つて確認したが見当たらない。

そういえば、先週もパンツが一枚なくなつたばかりだ。

「もう古いからなくなつても困らないが……」

次に朱莉がきた時にでも聞いてみるか。

こうして、とてつもなく慌ただしいレンタル家族一週目は終わったのだった。

3

変わらぬ日々と、修羅場な日々

ie ni kaeru to
kanojo ga kanarazu
nanika shiteimasu

新学期が始まって二週目。

クラスメイトたちは徐々に新たなコミュニティを形成していく。

プロのぼっちにとって、新学期は最も注意しなければならないイベントの一つだ。

なぜなら新しい環境というのは、誰もが積極的にコミュニケーションを取ろうとする。

普段仲良くない奴や初めて顔を合わせる奴とも挨拶をしたり、話すこともないのにお目当

てのグループに入ろうと、まるでトーテムポールのように傍で立っていたり。

その裏では、お互いのポジションを賭けた牽制のし合いが繰り広げられる。

『あいつとこいつはどっちが上だ？』『俺はこいつよりは上だろう』『あいつは敵に回さない方がいい』などなど、無意識のうちにそうやって上下関係を作り上げていく。

一度決まってしまうば覆すのは難しいため、誰もが必死になる裏新学期イベント。

うむ。実にくだらない。

そんな光景を我関せず眺めながら、俺は話しかけられた際、お一人様理論のもと徹底してニュートラルな対応を心掛けた。塩対応と言わないまでも必要最低限のコミュニケーション。

そうしているうちに、クラスの連中は『あ、こいつは違うな』と思ったんだろう。

俺の狙い通り、徐々に声を掛けてくる奴は少なくなっていくた。

でもまあ、傍から見たらこんな俺を可哀想だと思ふ奴もいるかもしれない。

だが、俺に言わせればそんなことを思ふ奴の方が百倍可哀想としか思えない。

必死になって作っているその人間関係が、後の人生においてどれだけ意味がある？ 貴重な

学生時代を人間関係に振り回されながら無駄に過ごすなんて、どうかしてる。

しかも気付くのは大人になってから。

同窓会なんかで言い訳のように思い出を美化するからたちが悪い。

人生の強者とは、今ではなく将来を見据えた行動をとることができる者。

そのための孤独は、一人で生きて行く強さを身につけるための得難い経験となる。もし一人で過ごしている同志諸君がいたら、そう胸に刻んでぼち飯に耐えて欲しい。

未来の自分のための孤独——そう考えられればもはや勝ち組に等しい。

だが、それでもクラスに一人は物好きな奴がいるもので——。

「いってえ！」

「おっはよーう泉ヶ丘君」

俺の背中を思いつきりぶつ叩き、挨拶をしてきたのは戸祭羽風。

三日に一度はこうして挨拶をしてくる物好きすぎる奴だった。

クラスのムードメーカーにして、コミュニケーション能力の塊のような女子。良い意味でも悪い意味でも人を区別しない性格のせいかな、こうして俺の孤独耐性をガンガン下げてくる。

「そんな本気で痛がらないでよ。まるでわたしが怪力みたいじゃない」

「誰だって油断してるところをぶっ叩かれたら叫びたくもなるだろ」

「そっかそっか。じゃあ次からは声を掛けてから叩くようにするね」

「順番の問題じゃねえよ。そもそも叩くのをやめ——」

「あ、おっはよう！」

話も聞かず、戸祭は他のクラスメイトのもとへ向かう。

「おはよ」

そしてもう一人、物好きな奴がいた。

「ああ。おはよう」

隣の席の築瀬^{やなせ}みゆき。

戸祭ほどではないが、それなりに友達も多くクラスでも目立った存在。ちょっと軽めのその容姿から交友関係も軽い女子が多いが、クラスの中心人物の一人だった。

前も思ったが、どうして築瀬が俺に挨拶をしてくるのか全くわからん。この手の女子はむしろ俺みたいな奴は毛嫌いするタイプだろう。隣の席のよしみだろうか？

だとしたら、見た目に反して案外いい奴なのかもしれない。

案外こういうタイプこそ面倒見がいいなんてよくあることだ。

「みんな、おはよう」

そして聞きなれた声と共に教室に入ってきたのは朱莉^{あかり}。

朱莉はこの数日でクラスメイトとも仲良くなり、その存在感を増していた。

二人の時は押しが強くかなりずれたところがあるが、クラスメイトに対してはそんなこともなく一般的な優等生と言っている。クラス委員長としても頑張っていた。

美人で性格が良く、人当たりも良いとなれば男子生徒だけでなく女子生徒からも人気がでるのも当然だろう。戸祭とはまた違った意味で、周りから支持を得ていた。

だが、傍から見ている俺だから気付く——中にはそれを快く思わない奴もいた。たぶん、当人たち以外で気付いているのは俺だけだろう。

どこかで一度、朱莉に注意を促した方がいいな。

そう思いながら、自分が誰かの心配をしていることにむず痒さ^{がゆ}を感じる。

少し前の自分だったら、わかっていても我関せずだったのにな。

その日の放課後、俺はいつもどおり一人で帰宅をしていた。

さて、いったいどうしたものか——歩きながら考える。

朱莉のことを快く思っていない女子生徒が数名いるのは間違いない。

女つてのは怖いよな。表向きには仲良くしているんだが、相手がいなくなったとたんに態度を変えたり、本人がいなくてどこでえぐい悪口を言ったり。

一人でいると、そういうところに気付いたり聞こえてきたりしてしまう。

今までだったら気にせず放っておくんだが、朱莉となればそうもいかない。

ただ、この件について朱莉に非はないだろう。

単純に相手の嫉妬しつととやっかみだ。

突然やってきた転校生がクラス委員長に推薦されてクラスで注目を浴びていく。それを快く思わない奴だつて一人や二人いて当然だ。転校生への洗礼と言ってもいい。

普通の奴はその辺に気を使うんだが、朱莉は根が純粹すぎて気付かない。

周りに対するアンテナが、致命的に低いように思えた。

「そういう意味では、やっぱり戸祭はすげえよな……」

本来、戸祭のように絶大な人気を誇る奴が誰からも受け入れられることはありえない。むしろ朱莉のように、一部のクラスメイトからやっかみを買う方が普通だろう。

俺もお一人様生活を始めた当初、クラスで浮いてしまったことがあるからわかるが、普通の連中にとって普通じゃない奴つてのは、少なからず攻撃の対象になるものだ。

ちよつとアイドルに詳しいだけで『ドルオタかよ』とか、アニメに詳しいだけで『アニオタ

キモ!』なんて言いやる女子。『ジャニオタとなにが違う!』と言ってやりたい。

好きなアイドルグループの推しメンやアニメキャラのグッズにかけるお金と、ドームでアイドルに黄色い声援を送るために使うお金に優劣なんてありはしない。

向き合う先が違うだけで、そこに懸ける情熱は等しく平等であるはずなのに、結局は理解されるかされないかの問題だけで普通じゃない奴呼ばわりをされてしまうわけだ。

つまるところ、誰もが普通を演じ、普通の中で右に倣え、普通に囚^{とら}われて生きている。

それでいて学生らしい趣味や嗜好なんかは、個性という都合のいい言葉で褒^ため称^たえるからタチが悪い。ふざけた青春という名の格差は広がるばかりだ。

戸祭の件でいえば、捉^{とら}えようによつては八方美人だと言う奴もいるだろう。

それなのに、そんな悪口は一切ないんだから、ある意味ふざけている。

でも俺にはわかる。どのグループにも属さず傍から眺めていた俺だからわかる。

あいつは一見なにも考えていないように見えて、実は感度の高いアンテナを常に張り巡らせ周りに合わせる努力をしている。しかも、その苦労を一切周りには気付かせない。

まあ本人が苦労していると思つてなく、素でやっている可能性もあるけどな。

少し話がそれたが、それにしても。

「なんて伝えたもんなあ……」

そんなふうに悩んでいる時だった。

不意に目の前に、見覚えのある姿が現れた。

「……とりあえず、その裁ちばさみをしまえ。お巡りさんの世話になりたくなくやな」
敵意全開でこちらを睨みつけているのは朱莉の妹の雫だった。

「待ち伏せしてたのか？」

「そうよ。何時に学校が終わるかわからないから、かれこれ三時間ほどね」

三時間……ご苦労なこった。

「そいつは悪かったな。お詫びにお茶でも奢るぜ」

「だ、誰があんたになんて奢られるもんですか！」

裁ちばさみをこっちに向けて威嚇をするんだが、なんていうか犬っぽいなこいつ。

小柄でキャンキャン鳴き叫んでいて、まるでご主人様（姉）をとられて怒っているポメラニアンのようなだ。髪がふわっふわだし。ちよつともふもふしていい？

なるほど。すぐキレルポメラニアンと思ってしまえば、別に怖くもなんともない。

人は好きじゃないが動物は大好きな俺にとって、むしろ可愛くすら見える。

「まあそう言うなって。なんならケーキも付けるけど」

「ケ、ケーキ……そんなものにつられる私じゃない！」

なんて言いながら、空いている手で口元を拭う。

おいしい。怒りが食欲に負けそうだぞ。

「そうか、そいつは残念だ。俺に話があつてきたんだろ？ 三時間も立たせっぱなしにして悪かったと思つての提案なんだが仕方ない、お土産も買つてやれないがここで話そう」

「お、お土産……」

「この近くに美味^{おい}しいケーキ屋があつてな、そのバームクーヘンが絶品なんだ」

雫の腹からめちやくちやでかい音が鳴った。

怒りが食欲に完全敗北した瞬間である。

「そ、そこまで言うならそうね……奢らせてあげてもいいわ」

餌^{えづ}付けに引つ掛かるとか、こいつマジアホだろ。

いいぞいいぞ。アホなポメラニアンは大好きだ。

「そいつはありがたい。じゃあ行くか」

「ええ。さっさと連れて行くがいいわ。そして私に奢るといいわ！」

バカとなんとかは使しよう。

ちよつと言葉の使い方が違うが、こんなところで刃物を振り回されるよりよっぽどいい。

またお巡りさんのやつかいになる前に、雫を連れて店へ急いだ。

店に着き、注文を終えた俺たちは一番奥の席に向かい合つて座つていた。

俺はアイスコーヒを頼み、雫は抹茶オレにイチゴのショートケーキ。

雫にも話したとおりこの店の一番はバームクーヘンなんだが、それは帰りに持たせてやると言ったら二番人気のイチゴのショートケーキを頼んだ。

二番人気は教えていないのに選ぶあたり、犬の嗅覚きゅうかくつてやつはすげえな。

ちなみにバームクーヘンは既に購入済みで、雫の隣に置いてある。

「本当にいいの？ 後でお金を払えとか言わない？」

「言わねえよ。我慢できないなら先に食べていいぞ」

「いただきます！」

お預けを食らっていた犬が『よし』と言われた瞬間のごとくケーキに貪りむさぼだす。よしと言われるまで手を付けないあたり、多少の嫉しつけはされているらしい。

だめだ、もう俺にはこいつがポメラニアンにしか見えない。

笑いを堪えて眺めていると、二分も経たたないうちにケーキは雫の胃袋へ消えた。

「ごちそうさまでした！」

「はいよ。おそまつさま」

口の周りがクリームだらけなのは愛嬌あいぎょうだろう。

俺は紙ナプキンを片手に手を伸ばし、雫の口を拭いてやる。

「ん……ありがとう」

「どういたしまして」

ちゃんとお礼を言えるあたり、根は良い子なのかな。

「それで、今日はどうしたんだ？」

そう尋ねると、雫は少し俯うつむきながら呟つぶやく。

「その……この前は、お巡りさんに通報してごめんなさい……」
まさかの言葉を口にした。

「おいおい、どうしたんだ？ 今日はずいぶん素直じゃねえか」

「お姉ちゃんに怒られたの……ちゃんと謝りなさいって」

ああ、そういうことか。

この前の感じを見るに、雫は朱莉に怒られるのが相当苦手なんだろう。

俺のことを毛嫌いしているはずなのに、朱莉に怒られたとはいえ謝りにくるなんて案外素直というか、可愛いところもあるじゃないか。

「気になるな。大好きなお姉ちゃんが知らない男と一緒にいれば、変な気を起こしちまう気持ちもわからなくはない。やりすぎな気もするが妹としては正しい行動なんじゃねえの？」

「知ったふうな口をきかないで。私が今日きたのは謝るためだけじゃない」

一転して顔色を変える。

「お姉ちゃんから全部聞いたわ。レンタル家族契約を今すぐ解消して」

口調は重く瞳^{ひとみ}は鋭く、明確な敵意を向けてくる。

右手をバッグの中に入れてるのは、裁ちばさみを取り出すためだろう。

雫がいかにもウルトラダイナミックなアホの子でも、こんなところで変な気を起こすとは思えない。これは警告の意味を込めた意思表示と捉えるべきだろう。

解消しないのなら、容赦はしないと。

「……………」

しばらく無言で見つめ合い、俺は大きく溜め息を吐いた。

「本音を言えば、解消できるものならしてやりたいさ」

「……………どういう意味よ」

「聞いているかもしれないが、レンタル家族契約は俺が決めたことじゃなくて、朱莉と俺の親父の間で決められたことなんだ。言ってしまうえば朱莉と親父が結んだ契約で、俺の意思だけじゃどうにもならん。俺も朱莉に解消を提案したんだが断られたよ」

「……」

「だから、どうしても解消させたいならお姉ちゃんに言ってくれ」

俺が答えると、雫は困った様子で俯いた。

「何度も言ったわよ……でも、ダメだったからあんたに会いにきたのに……」

そう呟く声は、僅かに震えているようだった。

そりやそうか。雫が朱莉をとめないわけがない。

「悪いな……期待に^{こた}えてやれなくて」

行動がエキセントリックすぎるだけで、雫なりに姉を心配してのこと。そう思うと、少しだけ雫が可哀想に思えてしまった。

「わかったわ」

すると不意に、覚悟を決めたような口調で話し出す。

「契約が解消できないのなら、強制的に無効にするまでよ……」

低く響く声に、全力で嫌な予感がした。

瞬間、雫はバッグから裁ちばさみを取り出して叫ぶ――。

「あんたを殺して私も死ぬわ！」

「どこの昼ドラのヒロインだおまえは！」

店内の店員とお客さんが一斉に俺たちに視線を向ける。

俺は慌てて雫を^{かつ}担ぎ上げ、レジに札を置いて一目散でケーキ屋から飛び出した。お釣りを貰^{もら}ってる暇なんてなかったよ。

「まったく……場所を選べ場所を……」

雫を担いだまま近くの公園まで全力ダッシュした俺は、息も絶え絶えにぼやく。気が付けば辺りは日が落ちて薄暗く、公園の灯りがつき始める時間だった。

「こうなったらもう、最終手段よ……」

疲れ切った俺をよそに、雫はまた決意に満ちた瞳を向ける。

「もう私には、二人の契約を解消させることはできない。だから——」

上げた顔は、全てを覚悟した人間のそれだった。

「なっ——!?!」

不意に雫は着ていた制服のシャツのボタンを全て外す。

その場にシャツを脱ぎ捨て、パステルカラーの黄色い下着と姉ほど豊かではない胸元が露わになる。透き通るような白い肌が、こんな暗闇でさえはつきりと浮かんでいた。

なにしてんだ——!?!

とめようとする間もなく雫が叫ぶ。

「私があるの犬になるわ——!」

夜の公園にとんでもない言葉が響き、俺の思考がとまった。

とめようと伸ばした手が、掴みどころを失って宙に浮かぶ。

「あんたが望むなら、犬でもメイドでも性奴隷でもなんでもなる! だから、お願いだからお姉ちゃんの処女だけは! 処女だけは堪忍して! 私が代わりに全てを捧げるわ!」



かつてないほど深い溜め息が出た。

「私は……本気よ！」

雫はそう口にする、俺の手を掴んで自分の胸に押し当てた。

小さいながら下着の上からでも柔らかな感触が手のひらに伝わってくる。だが、初めて女の子の胸を触った感触を喜ぶような気分にはなれなかった。

「おまえなあ……」

いい加減にしろよ。このバカが……。

その覚悟があまりにも斜め上すぎて、呆れを通り越して怒りすら覚える。

俺は胸から手を離し、ふざけたことを口にする雫の頬を掴んだ。

「そういう台詞はな、本気でも言っちゃダメだ」

「むぐう……………」

俺は思いのほか真剣に言っていたらしい。

雫は驚いた表情で押さえられた口をパクパクさせながら黙り込む。

「おまえが本気で姉ちゃんのために想って言ってるのはわかる。けどどな、言っていないことと悪いことがあるだろ？ おまえの提案を俺が受け入れたら姉ちゃんはどう思う？」

雫は眉をひそめて目を逸らす。

「私の代わりに全てを捧げてくれてありがとう、なんて言うと思うか？ 自分を大切にできな

「奴が、相手を大切にしてやれるはずないだろ」

自分で言っておいてなんだが、大切な人なんていない俺が言っても説得力ゼロだろ。だが、俺の事情なんて知らない雫にとっては、それなりに効いたらしい。

「……ごめんなひゃい」

口がタコさん状態のまま、小さく呟いた。

「神に誓って朱莉に手を出すことはない。どちらかといえば俺の方が手を出されるような気がしなくもないが、全力で逃げ切ってみせる。だから心配するな」

後半の言葉はいまいち伝わらなかったみたいだが、雫は小さく頷いた。

大人しくなった雫に安堵し、ポケットからスマホを取り出して朱莉にかける。

『はい。朱莉です』

『悪いなこんな時間に』

『いえ、どうされました？』

『実はな、雫が訪ねてきて今一緒にいるんだ。悪いけど出てこられるか？』

『わかりました。すぐに伺います』

朱莉に居場所を告げて通話を切る。

それから朱莉がくるまで俺たちはベンチに座って待っていたが、朱莉が到着するまで雫が口を開くことはなかった。

朱莉がきたのは二十分後。

朱莉はくるなり雫に厳しく言い放った。

「雫、また颯人さんにご迷惑をおかけしたの？」

「ああ、いや、違うんだ」

「違う？ なにがでしょう？」

「雫は俺に謝りにきたんだよ。それで話し込んで、いい時間になっちゃってさ」

そう説明すると、朱莉は納得したようだった。

かなり端折^{はしよ}ってはいるが、概ね間違いはない。

「今日は朱莉の部屋に泊めてやれないか？ 明日の朝一で帰れば学校にも間に合うだろう」

すると、朱莉はなにかを察したんだろう。

「……わかりました。雫、一緒に帰りましょう」

朱莉が声を掛けると雫は小さく頷き、朱莉に抱き付いた。

「颯人さん、ありがとうございました」

「別になにもしてないけどな」

俺がそう答えると、雫がなにか言いたげに見つめてくる。

「諦^{あきら}めないから……絶対に」

「おう。せいぜい頑張ってみな」

ただし、やり方は間違えるなよ——とは今さら言う必要もない。

「颯人さん、本当にありがとうございました。今日はこれで失礼しますね」

「ああ——いや、ちょっと待ってください」

雫を連れて帰ろうとした朱莉を呼びとめる。

「なんででしょう?」

「こんな時にする話でもないんだが、ちょっとだけいいか?」

「はい。もちろんです」

俺は朱莉を連れ、雫から少し離れたところで口にする。

「あのさ、クラスメイトたちについてなんだが……」

なんて言うべきか。

散々考えたが、オブラートに包んだ言い方が見つからない。

いや、ここで濁しても仕方がないだろう。

「気を悪くしないで聞いてくれ。たぶん、朱莉のことを快く思っていない奴がクラスに少しいると思うんだ。だから、立ち回りについて少し気を付けた方がいい。なんていうか……朱莉はクラスに馴染^{なじ}んで上手^{うま}くやってるだろ? そういうのを妬^{ねた}ましく思う奴もいる」

すると朱莉は小さく頷き。

「心配をしてくださってありがとうございます。ですが大丈夫です」
思いのほかあっさりと笑顔でそう答えた。

その笑顔に、僅かに違和感を覚える。

伝わらなかったんだろうか？

「颯人さん、私からも一つ、お伺いしてもよろしいでしょうか？」

「え？ ああ、なんだ？」

「失礼なご質問かもしれませんが……颯人さんはクラスで孤立をしているように見えます。私
が知っている二人の時の颯人さんとは明らかに違うので、少し気になっています」

一瞬、戸惑ってしまった。

いつかは聞かれるだろうとは思っていたが、まさかこのタイミングだとは。

いや、唐突なのはお互い様か――。

「俺はさ、高校に入ってからずっと一人ですごしてきたんだ」

隠すことなく話そうと思った。

「色々あってさ、人とつるんだり群れたりすることを避けてきた。友達ができないんじゃないよ
と、作らないだけって言ったら強がりに聞こえるかもしれないが、事実、あえて作らないよう
に周りと接してきた。一人でいる方が気楽ってのもあってな」

朱莉は黙って俺の言葉に耳を傾け続ける。

「去年一年間はそんなふうにごしていたから、クラスの連中もあえて俺に絡んでこようとはしない。俺はそんな現状に満足しているし、これからも友達を作るつもりはない。朱莉からしてみたら異常に見えても仕方がないかもな」

一通り説明を終えると、朱莉はなんとも言えない表情をしていた。
「ありがとうございます。お話をしていただいて」

そう言って深々と頭を下げた。

朱莉は頭を上げると雫に歩み寄り、その手をそっと握る。

「帰りましょう——颯人さん、失礼します」

「ああ、ちょっと待ってくれ」

俺は手にしていた紙袋を雫に渡す。

「ほれ。約束のバームクーヘンだ。朱莉と一緒に食べな」

「……ありがとう」

雫は紙袋を受け取ると、朱莉の背中に隠れた。

「では失礼します。おやすみなさい」

「おやすみ……」

公園を後にする二人を見送る。

少しだけ、複雑な思いだった。

自分が一人でいる理由を、こうして誰かに話したのは初めてのこと。この気持ちはなんだろう。言葉で形容できない複雑さが胸を締める。

「ん……？」

その時だった——暗がりの向こうに、人影のようなものが見えた気がした。目を細めて辺りを見渡すが誰の姿も見えない。

「気のせいかな……」

やっぱ疲れてんのかな……。

そんなことを思いながら、部屋に帰ったのだった。

*

そして金曜日。明日は朱莉がやってくる週末。

このくらいの時期になると、ほぼクラス内でのグループが決まる。

特に顕著なのは女子——うちのクラスでは、大きく二つのグループに分かれていた。

一つは朱莉を中心とする、比較的^{まじめ}真面目な女子のグループ。

転校生でクラス委員長というポジションは多くのクラスメイトから人気と信頼を集め、気が

付けば周りに人を集めて中心人物となっていた。

もう一つは俺の隣の席の築瀬を中心とする、やや軽めの女子グループ。

化粧が派手でノリが軽く、今時の女子高生と言うべきか？ 正直、俺の得意ではないタイプの女子の集まり。座り方が雑で普通にパンツとか見えているのはサービスだろうか？

煩惱にまみれた男たちにパンツを見せてやることで、内に秘める欲求を発散させ性犯罪の低下に貢献しようとしているのだとしたら、彼女たちの献身性に頭が下がる。

それはともかく、お察しのとおり、二つのグループはあまり仲が良いとは言えない。

朱莉のことを快く思っていない女子生徒がいるのも後者のグループだった。

ちなみに男たちは俺を除いて皆仲が良く、バカ話で和気あいあいとしている。

そんな中、俺は一人複雑な思いを引きずっていた。

理由は言うまでもない——この前、朱莉に尋ねられた件について。

同じクラスならいずれ疑問を持たれると思っていたし、その時は話そうと思っていたことだが、話したことを思った以上に気にしている自分がある。

一人の時には、こんな気持ちにならなかったのに——。

「おっはよーう泉ヶ丘君♪」

「ぐはっ！」

やっぱり背中をぶっ叩かれた。

「戸祭……頼むから挨拶の度にぶつ叩くのはやめてくれ。そのうち折れる」

「今日はちゃんと挨拶してから叩いたでしょ？」

「いやだから、順番の問題じゃないんだって……」

切実に訴えると、戸祭はぶりっこ全開で『ゴメンゴメン♪』と口にした。謝らなくていいから叩かないでくれ。

「さつきからぼーっとしてるけど、女の子の下着でも覗いていたのかな？」
なぜバレた。ちよつとだけなのに。

「俺がぼーっとしてるのはいつものことだろ？」

「そう？　じゃあ虚ろな顔して誰を見つめてたのかな？」

からかうような笑顔を浮かべながら俺の顔を覗き込む。

「……気のせいだろ」

近い。近すぎる。ちゅーされても文句言えない距離だぞおまえ。

それはともかく、無意識に朱莉を目で追ってしまっていたんだろうか？

俺は何事もなかった素振り^{そぶり}で視線を窓の外に向ける。

「ねえねえ泉ヶ丘君」

「なんだ？」

至って冷静に返す。

お一人様理論その② 周りに対しては常にニュートラルに。

そう自分に言い聞かせ、平常心を取り戻そうとした時だった。

「日曜日、わたしとお出かけしない？」

「ぶはっ——！」

取り戻しかけた平常心が砕け散った。

「……誘う相手を間違えてないか？」

散らばった平常心を慌ててかき集め、努めて冷静に返す。

「間違えてないよ？ つまりね、わたしとデート——」

戸祭は致命的な単語を口にしようとした瞬間、俺は遮さへぎるように大きな音を立てて席を立つ。

「悪いな。他を当たってくれ」

その場を立ち去ろうとした時だった。

戸祭は俺の耳元をくすぐるように呟く。

「月夜野さんのことについて、お話がしたいんだよねえ♪」

思わず足をとめてしまったことを後悔した。

リアクションを示してしまった時点で、もはや言い訳は通用しない。

振り返ると、戸祭は意味深な笑顔を浮かべて俺を見つめている。

俺に残された唯一のお一人様生活——平穏な学校生活が、終わる予感がした。

昼休み。俺はいつものように屋上に来ていた。

「戸祭の奴、なにを考えてんだ……」

以前から掴みどころのない奴だとは思っていたが、こんなことになるとは。

思わず空を見上げる。

雲一つなく嫌になるくらい美しい青空が広がっていて、まるで俺の心境をあざ笑うかのように恨めしい。新学期が始まってからトラブルばかりだ。ちくしょう。

「愚痴っけていても始まらねえか……」

戸祭が口にした『月夜野さんについて、話がしたい』という言葉。

今はその意味するところについて考え、対策を取らなければいけない。

いや、意味なんて考えるだけ無駄だろう。

この場合、想像しうる最悪を想定しておくべきだ。もし戸祭の言葉の意味がそれ以外だとしたら、むしろ全裸で小躍りしながら喜んでいいレベル。

そして想定しうる最悪とは——俺と朱莉の関係についてだろう。

「でも仮にそうだとしたら、どうしてバレた？」

焦りと、不安と、混乱と……様々な感情が頭の中をぐるぐる巡る。

一年間かけて築き上げてきた理想の一人様生活。

それがまさか、こんなに早く終了の危機を迎えることになるなんて。

いや、違うか……それはもうすでに、朱莉が現れた時に終わっている。

だからこそ、学校内での立ち位置だけは死守したかった。

戸祭と同じクラスになった時に注意を払おうと思っていたのに、それを怠ったのはレンタル家族契約に意識を取られていたせいだ。

リスク管理が甘かった——そんな後悔をしている時だった。

屋上に昇ってくる複数の足音が聞こえた。

「なんですか？ お話って……」

聞きなれた声に耳を疑う。

身を隠して窺うと、そこには朱莉と見慣れない男子生徒の姿があった。

「突然こんなところに連れ出してごめん。どうしても伝えたいことがあるんだ」

男子生徒は真剣な表情で口にする。

その光景は、今まで何度も目にしてきた青春のワンシーンだった。

「君のことが好きなんだ。付き合ってもらえないかな？」

男子生徒が口にした言葉は、おおよそ想像どおりだった。

「朱莉は驚いたように口元を押さえる。

少しして、朱莉は深く頭を下げた。

「ごめんなさい。あなたとお付き合いはできません」

「どうして？ 好きな男でもいるの？」

その問いに朱莉は一度目を伏せた後、相手を真っ直ぐ見つめて口にする。

「——はい」

その言葉に、どうしてか胸が痛んだ。

朱莉が返事をする、男子生徒は無言でその場を後にする。

しばらくすると朱莉も屋上を後にし、俺はその背中を見送った。

そして、一つの考えが頭をよぎる。

——本当に、レンタル家族契約を継続していいんだろうか？

周りにバレルリスクだけじゃない。

俺が元の生活に戻りたいというだけじゃない。

朱莉の今後の生活を考えれば、よくないんじゃないか？

「好きな人がいたって……俺と一緒にいたら、まずいだろ……」

お一人様生活は、自分が自由になれるだけじゃない。

誰にも迷惑をかけなくてすむ——だからこそ俺は、一人でいたのに。
もはやそんな生活とは、ほど遠いと思わざるを得なかった。

4

望まないデートと、暴かれた秘密

土曜日の朝、朱莉はいつものようにやってきた。

「今日は特に予定はありませんね」

「ああ。そうだな」

こうして話をするのは、雫を迎えに来てもらった時以来。

お互いに少し気まずい話をしてしまったんだが、朱莉は特に気にした様子もなく学校では見せない二人きりの時の笑顔を向けてくれる。

俺がどうして一人にいるようになったのか？ 朱莉はきつと、その理由を気にしているはずだ。それでも聞いてこないのは、気を使ってくれているからだろう。

その気遣いが、今は少しだけありがたい。

「たまにはお部屋でのんびりしましょう。それもまた家族の過ごし方の一つです」

そんな話をしながら、二人並んで源さんに餌をあげているんだが……。

どうしてだろうか？ 朱莉の距離が不必要に近い気がする。

「あ、あのさ……ちよつと餌をあげづらいんだが」

ie ni kaeru to
kanojo ga kanarazu
nanika shiteimasu



「でしたら私があげましょうか？」

「いや、そうじゃなくてな……」

あげづらい理由を全く理解していないのか、さらに近づいてくる。

もはや密着しすぎてほっぺが触れそうなんだが……。

いや、意識するな。意識をしたら負けな気がする。

にしても、朱莉は好きな人がいると言っていたのにいいんだろうか？

仕事とはいえ男の部屋に上がり込み、一緒に寝て、こんな密着状態でいるなんて。

よくはないよな……朱莉に彼氏ができたとして、もし俺がその彼氏だとしたら絶対嫌だ。

今後の生活について、その辺りも機会があれば話しておきたいんだが、今はそれどころじゃない。それよりも優先すべき問題が目の前にある。

それは明日に控えた戸祭とまつりのお出かけの件。

果たして、どこまで朱莉に話すべきか——？

「あの……颯人はやとさん？」

「ん？ どうした？」

気が付くと、朱莉が心配そうに俺の顔を覗のぞき込んでいた。

「源さん……もうお腹なかいっぱいみたいですよ？」

「え？」

源さんに目を向けると、俺のあげた餌を食べすぎて丸太のように横たわっていた。

「源さんごめん！ 大丈夫か!?」

可愛い前足を上げてフリフリしながら大丈夫とアピール。

源さんは餌をあげるとあげた分だけ食べきってしまうため普段は量を抑えているんだが、考え事をしていたせいか過剰に与えすぎてしまったらしい。

過去、餌をあげすぎて異常に丸々と肥えてしまったことがある。

それはそれで、とても可愛かったんだが健康的とは言いがた難い。

「颯人さん、どうかされましたか？ 心ここにあらずといったようですが」

心配する朱莉に、俺は努めて明るく返す。

「いや、なんでもない。最近、親父の動画更新が遅いからどうしたのかと思ってな」

「そうですか？ いつもどおり、週に一度はアップされているようですが」

「あれ？ そうか？ 見落としていたのかもしれないな。どれどれ」

本当は既に視聴済みだったが、適当なことを言ったのがバレないようにスマホを手に取り親父の動画を再生し始めた。

『ブッシュクラフト親父の日常。シーズン2——第二話 水の確保』

今週は、生活を支える生命線ともいえる水の確保について。

飲み水だけでなく、料理や風呂、作物を育てるためにも必要であり、容易に水の確保ができ

ない山奥ではいかに効率よく確保するかがとても重要らしい。

今回取った方法は、川から直接ホームキャンプまで水を引く方法。

まずは膨大な量の竹を集め、半分に切って節を削り、植物のツルで繋ぎ合わせる。

それを近くの川の上流からホームキャンプまで数十メートルにわたって設置。上流から下流への流れと高低差を利用し、竹をつたって水が流れてくる仕組みを作り上げた。

めちゃくちゃ長い流しそうめん用の設備と言えばわかりやすいだろうか？

シーズン1の動画では粘土を焼成して作ったツボを使って水汲みをしていたが、移動距離や重い水を運ぶコストを考えれば、極めて効率的なシステムと言っていいたいだろう。

だが、歓喜しながら半裸で水浴びをするおっさんの画ヅラはどうかと思うぞ。

そしてラストはお決まりのルーティン。キメ顔横ビースで終了。

再視聴ということもあり、動画をほとんど見ずに考えていた。

戸祭の件について、今はまだ朱莉に話すべきじゃないだろう。戸祭の話が必ずしも俺の想像通りとは限らない以上、可能性の話をするのは不必要に朱莉を心配させるだけ。

まずは戸祭の出方を窺い、話を聞いてから――。

「なあ、朱莉」

「はい。なんでしょう？」

俺は腹を括って話しかける。

「明日なんだが、ちょっと所用で出かけることになったんだ」

「そうですか。もしご迷惑でなければ私も一緒にしましょうか？」

「いや、帰りが何時になるかわからないから部屋で待っていてくれ」

「わかりました。お留守番は任せてください」

結局この日は一日、なにも手に付かず終わってしまった。

*

「颯人さん」

「……ん」

自分を呼ぶ声に、意識が引つ張られた。

「颯人さん。起きてください」

朱莉の声が聞こえる。

今日は日曜日だろ……もうちょっと寝かせてくれ。

昨夜は朱莉に腕を掴^{つか}まれて妙な感触を味わったり、腕を引っこ抜いたらパジャマのボタンが全部とれていて見ちゃいけないものを見てしまったり、興奮しすぎて寝てないんだ。相変わらず朱莉は風呂を覗きにくるし……あっちもこっちも疲れてるんだよ。

「あと三十分……むぐう！」

両手で思いつきりほつぺをムニムニされた。

無言の抵抗。そんなことをされても起きないぞ。

「いいんですか？ 今日はお出かけですよね？」

瞬間、一気に頭が覚醒^{かくせい}する。

「うおおおおおおおおおおおおお！」

目を開けると同時、全力で叫んでしまった。

近距離に迫る朱莉の顔。近すぎてピントが合わず理解するまで一瞬パニック。

「近い！ どうしたいったい!？」

「何度呼んでも起きないので、近くで呼べば起きるかと思ひまして」

「にしても近い！ 一步間違えれば事件だったぞ！」

目覚め方次第じゃ俺の唇が奪われる距離だった。

「ずいぶんごゆっくりですが、お出かけの時間は大丈夫ですか？」

時計に目を向けると、時計は十時を回っていた。

やばすぎる——慌てて飛び起き着替え始める。

待ち合わせはショッピングモールに十時半。

着替えながら、移動手段と到着時間を計算する。

この時間ではちょうどいいバスはない。次のバスを待てば十分以上の遅刻だろう。

であれば自転車か？ 信号次第だが、遅くても二十五分あれば着く。どちらにしても遅刻だが相手を待たせている以上、一分でも早く着かなければならない。

着替えを終え、ウォーターサーバーの水を一杯飲み干し――。

「行ってくる！ 帰る前には連絡するから！」

「いつてらつしゃい。お掃除や洗濯は済ませておきますね」

朱莉に見送られながら部屋を飛び出し、階段を下りたところで足がとまった。

そうだ、洗濯といえは俺のパンツがなくなつたこと、まだ聞いてなかった。

時間はヤバイが憶えているうちに聞いておいた方がいい。

俺は一度部屋に戻り、玄関を開けた時だった。

「はあああ……………」

俺は幻視でも見ているんだろうか？

目の前には、見覚えのある光景が広がっていた。

「はああああ……………」

部屋の中には床に座り込んでいる朱莉の姿。

どうしてか、俺のパンツを顔に押し当てて悩ましい声を上げていた。

「あ、朱莉……………なにしてた？」

声を掛けると、朱莉は不意に満面の笑みを浮かべ。

「あら？ タオルと間違えてしまったようです」

「そ、そうか……間違えちゃったか」

思わずそう返してしまっただが、そんなことがあり得るだろうか？

洗濯機の中に入れておいたはずのパンツだぞ？

「颯人さん、お時間がなかったのでは？」

朱莉に言われてハツとする。

そうだ！ こんなことをしている時間はない！

「とりあえず行ってくる！」

慌てて部屋を飛び出す。

「……ふひひっ」

出掛けにゲスい声が聞こえた気がしたが、今はそれどころじゃない。
結局、行方不明になったパンツ二枚のことは聞けなかった。

全速力で自転車をこいだが、到着したのは約束の時間の五分後。
駐輪場に自転車を投げ捨て、走って待ち合わせ場所に向かう。

「戸祭も遅れてくれてればいいんだが」

このショッピングモールはシュガーモールという呼称で、地元で一番人が集まる場所。敷地内には家電量販店や映画館、温泉施設なんかもあり、年齢問わず楽しめる場所が揃っている。その中でも珍しいのが、アルパカ広場と呼ばれるスポット。

名前の通りアルパカと触れ合える広場なんだが、ここを待ち合わせ場所にする男女は多く、俺と戸祭の待ち合わせ場所もこのアルパカ広場だった。

「急がないと——」

向かう途中、ふと辺りを見回した時だった。

「え……?」

モール前のエントランスに立っている女性を見て目を疑った。

「こまじゅう駒生先生……?」

普段目になっているスーツ姿ではなく私服。しかもなんていうか、一言でいうなら昼間なのに夜の店の人みたいな派手な格好で、サングラスしてるから一瞬誰かわからなかった。

「ん……おまえは泉ヶ丘いずみがおかか?」

名前を呼んでしまったのが失敗だった。

駒生先生は俺に気付き、サングラスを外しながら近づいてくる。

「おまえみたいな奴やつが休日やすみにこんなところにくるなんて珍しいな」

「おまえみたいな奴がつて……駒生先生、俺のことなんてそんな知らないでしょ」

「担任教師を舐めるなよ。一週間もすればだいたいわかるさ」

本当かよ。そんな根拠のない理解の仕方をされても困る。

「……女か？」

駒生先生はニヤリと笑いながら口にする。

「なんでそう思うんですか……？」

「その慌てようにして、この先は男女の待ち合わせスポットのアルパカ広場。かくいう私も男性を待っているのだ。なにを隠そう、今日は婚活アプリで出会った男性とデートなんだ！」

「はあ……」

いや、その格好をみれば嫌でもわかりますよ。

無駄に胸元開けすぎじゃないですかね？ おっぱい見えてますよ？

「しかしまあ、おまえが女と待ち合わせとはな」

「駒生先生こそ、シュガーモールで待ち合わせなんてちよつと似合いませんね」

ここは大人のカップルよりも家族連れや学生の方が多いはず。

「そう言ってくれるな。私だってここよりもインターシティの方がよかったさ」

インターシティというのは市内の南にあるもう一つの集合商業施設。

百貨店と専門店が併設されたところで、ブランドショップやセレクトショップも入っている

ため社会人が多く集まる場所。ここよりも少し客層が上のイメージ。

「待ち合わせ場所をここにしたのは、今日の相手が地元の大学生だからだ」

「大学生!？」

「地元の大学に通うなかなかイケメンの四年生だ。来年には社会人、相手の卒業とともに入籍すれば早くてあと一年。これでようやくクソガキどもの相手から解放される。三十歳手前でチャンスがやってくるとは婚活の神も私を見放してはいなかった!」

駒生先生は嬉々^{きき}として語る。

婚活の神ってなんだよ。そんなのがいたら、とつくに結婚できてるんじゃないですかね。もしくは今の今まで売れ残っている事実から、神に見放されているんだと思います。

そんなこと言ったら殺される。

「今日のためにわざわざクソ高い下着も新調したんだ……ふふふっ今日は帰さんぞ」

目が完全に獲物を狩るハンターのそれ。

相手もよく七歳も離れた相手と会う気になったな。まあどうせ、年上なら後腐れなくワンチャン狙い^{ねら}い! とか思ってたんだろうけど相手が悪い。アラサー女の執念を舐めすぎだ。

責任とってちゃんと引き取ってくれよマジで。

「休み明け、お互いにいい報告ができるよう頑張ろうじゃないか!」

駒生先生は上機嫌で俺の肩をバシバシ叩く^{たた}。

どうぞ勝手に頑張ってくださいね。駒生先生に一礼し、その場を後にする。時間を無駄にしてしまったが、アルパカ広場に着くとまだ戸祭の姿はない。ほっと胸を撫なで下ろした時だった。

「おっそーい♪」

突然、背後から両方のほっぺをつままれた。

驚きながら振り返ると、そこには笑顔を浮かべる戸祭の姿があった。

「泉ヶ丘君は女の子を待たせて喜ぶタイプの男の子なのかな？ ちょっと趣味悪いぞ♪」
相変わらず悪戯っぽい笑顔で冗談ぽく口にする。

いつも教室で見かけるその笑顔に、俺は少しだけ冷静さを取り戻した。

「待たせて喜ぶタイプどころか、待たせる機会すらなかったタイプだ。悪いな、誰かと待ち合わせするなんて数年ぶりです。昨日は寝つけなかった。単純に寝坊だ」

そう答えると、戸祭は腹を押さえて笑った。

「普通は言い訳の一つでもするところでしょう？ 潔い男子は嫌いじゃないけどさ」

「そいつはどうも」

「じゃ、とりあえず中に入ろっか♪」

戸祭に手招きされ、俺たちはシュガーモールの中に入って行く。

モール内は日曜日ということもあって、学生や家族連れで賑にぎわっていた。

「すげえ人だなおい……」

人生ソロプレイの俺には、酔ってしまいそうな人の数だった。

どうしよう。今すぐ全力で帰りたい。

「今日は少ない方だと思っけどな」

「マジかよ。普段は来ないからよくわからん」

「え？ 友達と来たりしないの？」

「友達なんていないの知ってるだろ？ それとも悪口で言ってるのか？」

「これはこれは、失礼しました」

戸祭は明らかにわかっていて言っただろう。

からかうような笑顔で謝った。

「おまえくらいだよ。俺に話しかけてくるのは」

「あれ？ もう一人いるでしょ？ 隣の席の築瀬さん」

本当、こいつはよく見てやがる……。

「でもさ、なんでみんな泉ヶ丘君に話しかけないんだろ。わたしからしてみたら泉ヶ丘君てめっちゃ面白^{おもしろ}い人なんだけどな。なかなかあそこまで一人でいられる人いないよ？」

「おまえ、それはさすがに悪口だろ」

「半分ね。でも半分はホントに興味があつたんだ。でもさ、あそこまで徹底して一人でいられ

ると、なんか話しかけるのも悪い気がしてくるじゃん？ 好きでやってるんだろうし」

こいつは本当、どこまでわかって言ってるんだ？

いつも笑顔でいるため、ある意味それ以外の表情がないという意味ではボーカルフエイスとも言える。記憶を遡さかのぼってみると、戸祭が笑っている以外の表情を見た覚えがない。

「今日は周りに遠慮なく、泉ヶ丘君と話せるチャンスだからね」

「最初に最後のチャンスになることを願う。で、どこで話す？」

「せっかくだから色々見たいお店あるの。付き合って♪」

「は？ いやちょっと待て——」

「……ダメなの？ 今日楽しみにしてたのに」

泣きそうな顔で瞳ひとみを潤ませながら、俺の服の袖そでをつまみながら訴える。

まるで捨てられた子猫が通りすがりの人にすがるかのように。

「いや……ダメってわけじゃないが……」

「やったー！ じゃあ行こう♪」

「おい……」

次の瞬間にはケロッとして歓喜の声を上げた。

くっそ……引っ掛かる俺もアレだがずるいだろそれは！

他の男どもが戸祭のあざとさにやられるのが、少しだけわかった気がした。

「おい！ 早くー」

「へいへい……」

「おいてくよー！」

わかったから、そんな大きな声で呼ばないでくれ。

他のクラスメイトに会ったら余計ややこしくなる。

その時の言い訳を考えながら後を追った。

その後、戸祭に連れられてほぼ全てのアパレルショップを見て回った。

なんでも一足早く夏物の洋服を見たかったらしく、あっちに行きこっちに行き、試着をしては戻し『買わない』と言ったくせに後から『もう一度着てみたい！』と店に戻り……。

気が付けば買った洋服はかなりの数になっていて、それを全て持たされる俺。

こいつ、もしかして荷物持ち代わりに俺を誘ったんじゃないか？

そんなの取り巻きのペットたちに頼めよ。喜んで付き合うだろうが。

結局、戸祭の買い物は三時間に及び、コーヒーショップに入ったのは一時半だった。

「おまえなあ……いくらなんでも買いきりじゃねえの？」

戸祭の隣に山のように積まれた紙袋を眺めながら嘆息する。

「そう？ このくらい普通だよ？」

十を超えるショップの買い物袋が普通だと？

俺の五年分くらいはあるぞこれ。

呆れる俺の前で、戸祭は満足そうにアイスカフェオレを飲んでいた。

「そういうばさ、泉ヶ丘君とは一年の時から同じクラスだよね」

「情報技術科は二クラスしかないんだ。クラス替えしたって半分は元クラスメイト。五十%の確率なんだから別に珍しいことでもないだろ」

「そうなんだけど、わたしが言いたいのは一緒だったのにちゃんと話すのって初めてだなーってこと。ずっと一人でいるけど、泉ヶ丘君で誰かと一緒にいると死んじやう人なの？」

「そんな病気の奴なんていねえよ」

こいつ、本当に聞きづらいことを遠慮なく言ってくるな。

悪意がないのはわかるが、ここまで踏み込めるのも凄い。

「別に……その方が単純に気楽ってだけさ」

「そんな感じはするよね。別に人付き合いを避けてるわけじゃなくて最小限って感じだし、話しかければ普通に答えてくれるし。友達ができないんじゃないかって作らないだけって印象」

……改めてこいつは面倒だと確信した。

一見アホのように見えて、まあ本当にアホなんだけど、あざといながら周りに気を配るタイ

プなのは普段の行動からわかる。そうすることで、自分と相手の距離を測っているんだ。わかつてはいたことだが、こうして対面すると思いのほか面倒くさい。

「なにか一人でいたくなるような嫌なことでもあったの?」

「……………」

ダメだ——こいつと関わ^{かか}つちやいけない。

相手の懐^{ふしろ}にグイグイ入ってくるタイプの人間は、俺にとって最も危険だ。

「別に、友達を作らないことが間違いつてわけじゃないだろ。おまえには理解できないかもしれないが、世の中には一人で気楽に生きていきたい奴だっているってだけの話だ。俺に言わせりゃ積極的に友達を作ろうとしてるおまえの方がどうかしてる」

どうせなら嫌われた方が手っ取り早い。

お一人様理論にはやや反するが、こいつはイレギュラーすぎる。

「話の腰を折って悪いが、本題に入りたい」

もう早急に終わらせて、この場を離れるべきだ。

「月夜野^{つきよの}さんがどうのって言ってたが、聞きたいことはなんだ?」

話の主導権を握られる前に——そう思い、こちらから踏み込む。

だが戸祭は、真面目^{まじめ}な俺をかわすように笑顔で答える。

「まあまあ、そう慌てないの。わたし、お楽しみと好きなおかずは最後に取っておくタイプな

んだ。それにわたしの聞きたかったことの答え、実はもうわかってるんだー
もうわかってる？

「とりあえずさ、もうちょっと買い物に付き合つてよ。ここは奢^{おご}るからさ」

「はあ!? まだ買い物するつもりか!?」

「あと一つ行つてないお店があるの。そこで最後だから」

その言葉にホツとする。

それが終わったら、いい加減さつさと本題だ。

「わかった。次で最後だからな。なんの店だ？」

「下着ショップ——」

「ぶはっ——」

思わず咽^{むせ}てコーヒーを吹き出す。

「なに言つてんだおまえは！」

「よし。じゃあ行こっか」

「ちょっと待て！」

店を出る戸祭の後を、慌てて荷物を抱えて追い駆ける。

すると戸祭は俺から荷物を半分奪い、空いた俺の腕に自分の腕を絡めてきた。

「なにしてんだ！」

「荷物が多いから半分持ってあげたの」

「そうじゃなくて、荷物を持つ反対の手だ！ なにナチュラルに腕組んでんだよ！」

「はぁーい。レッツゴー！」

嫌がる俺を引っ張って歩き出す。

あまりの強引さごういんに、もうなにを言っても無駄だと悟った。

「お、おおう……」

やってきたのは通称、男子禁制秘密の花園。またの名は侵入不可のラストリゾート。

目の前に広がる綺麗きれいに陳列されたカラフルな布を前に、思わず変な声が出てしまった。普通の男子高校生がこの手の店に来ることはありえない。

せいぜい遠目に眺めるか、横目でチラ見しながら夜のおかずにするくらい。

もしも来られる奴がいるとしたら、よっぽどの勇者か特殊性癖の変態か、はたまた彼女という名の通行証をもつリア充じゅうだけ。つまり大半の男にとって異世界のようなもの。

それでも来たい奴は転生後にも期待して死ぬしかない。

それなのに、なぜ俺は学校一の美少女と下着ショップに来ているんだろうか……？

「なにぼーっとしてんの？ さ、行こよ」

「ちょっと用事を思い出した――」

「わかりやすい嘘を吐かないのー」

「待て待て待て！ 男が一緒なんておかしいだろ！」

やめて！ 俺の孤独耐性はもうゼロよ！

心の叫びが通じるはずもなく無理やり中へ連行される。

一歩足を踏み入れると、そこは三百六十度に臨むカラフルな下着の森だった。あまりの色の多さに目がちかちかする。様々な柄とデザイン、おまけにセクシーなベビードールまで。

ダメだ、とてもじゃないが平静を保ってられない。

店員さんや他の女性客の冷たい視線が突き刺さる。

『あらあら、仲がいいことね』『最近の高校生つてずいぶんませてること』『彼氏の好みの下着を買ってあげるのかしら？』『カップルでくるとかりア充死ね。百回死ね』

生暖かい声と嫉妬に満ちた声があちこちで湧き上がる。

やつぱ無理！ 戸祭を無理やりでも振り払って逃げるしかない！

「泉ヶ丘君の好みてどんな感じのやつ？」

「……………はい？」

まさかの質問をぶつこまれた。

「いや……………そんなことを聞かれてもだな……………」

もちろん俺とて健全な男子高校生。

女性の下着の好みくらいは……ある。

一言でいうのならレースの紐^{ひも}パン、色はピンク。できればレースは白であって欲しい。淡いピンクの生地と白レースのコントラストを想像するだけで朝まで眠れない。

まさか答えるわけにもいかず、返答に困っている時だった。

「あら？ 戸祭さんに……泉ヶ丘君？」

聞きなれた声に、背筋が凍った。

「ま、まさか……」

何度も聞いているその声の主が誰かなんて、間違えるはずもない。冷や汗をかきながら壊れたブリキのロボットよろしく振り返ると。

「あれー？ 月夜野さんじゃーん♪」

そこには引きつった笑顔を浮かべる朱莉の姿があった。

空気が死んだ。たぶん俺も、もうすぐ死ぬ。

終わった……俺はそつと考えるのをやめた。

「こんなところで会うなんて奇遇だね」

「ホントにねー！ 月夜野さんもお買い物？」

「うん。戸祭さんは泉ヶ丘君と二人できたの？」

「そうだよ。今日はデートなんだー♪」

「違う！ 断じてデートではない！」

「今日は天気もいいし、絶好のデート日和だね」

「うん♪」

朱莉は俺の方を見向きもせずに、戸祭と会話を続ける。

あれだ、おまえの話は聞いていないモード。

「ところでここ、下着ショップだよ。私の聞き間違いだったら申し訳ないんだけど、泉ヶ丘君に下着の好みを聞いてなかった？ もしかして二人ってそういう関係なのかな？」

「聞いてたよ。関係については——これから次第だよな♪」

「俺に同意を求めるな！ そんな未来は断じてない！」

「照れないでよー」

「照れてないわ！」

なにかがぶち切れるような音が聞こえた気がした。

目を向けると、なぜか朱莉は怒っているようで笑顔で目尻をピクピクさせている。

戸祭はそんな朱莉を見ながら必死に笑いを堪^{こら}えているようだった。

こいつ……わざとやってやがる。

「そんなわけだから月夜野さん、またね」

「待って、よかったら三人で一緒にお買い物でも——」

朱莉がそこまで言いかけて、戸祭は一蹴する。

「デートだから空気読んでくれる？ お買い物はまた今度行こーね」

戸祭は笑顔でそう告げ、俺と腕を組んでシヨップの奥へと足を進める。去り際に見た朱莉からは、言葉で形容しがたい負のオーラが出ていた。すまん朱莉。後で事情を……話せるかこれ……？

「じゃあ話の続きだけど、泉ヶ丘君の好きな下着の色ってなに？」

「はあ!? それまだ続いてんの!？」

「あつたりまえじゃん。あんなこと冗談じゃ聞かないでしょ？」

「本気でも聞くなあんなこと！」

「えーなんでよ。意地悪しないで教えてよ。参考までにさ」

こいつマジで大丈夫か？

普通クラスメイトの男に下着の好みとか聞くか？

断固拒否しようとしたが、すんでのところで踏みとどまった。

いや待て……もしかしたら、女子が男に下着の好みを聞くのは普通のことなんだろうか？
そういえば先日、朱莉との買い物時も部屋着の好みを聞かれたな。

しばらく友達を作っていない俺には、今どきの友達付き合いってのがわからない。人付き合い

いにおいて、俺の常識は他人にとって非常識な可能性がある。むしろその可能性の方がはるかに高い。

だとしたら、男の好みを参考に女子が衣類を選ぶというのは普通なのでは？

だとしたらだとしたら、俺は女子の下着の好みを口にしても許される？

俺が一人で過ごしているうちに、なんてエロに寛容な時代になったんだ！

「早く答えないと、今日のことクラスメイトに話しちゃおっかなー」

「おまっ……」

こいつ……今度は脅しできやがった。

わかった。そこまで言うなら答えてやろうじゃないか。

俺は今、下着の森の中心で好みを叫ぶ！

「レースの紐パン……色はピンク。できればレース部分が白だとありがたい……」

独り言よりもはるかに小声で囁いた。

「白レースで紐でピンクだね。なるほど♪」

学校一の美少女に下着の好みをカミングアウトするという、人生最大の羞恥プレイ。男の一生の中で、これほどまでに恥ずかしさを感じることがあるだろうか？

周りの視線がそろそろ限界。いっそ今すぐ消えてなくなりたい。

「ずばり泉ヶ丘君の好みはこれだ！」

「――!?」

気持ちとは裏腹に、全力で反応してしまい顔を上げる。

戸祭の手には、確かに白レースで紐でピンクな下着のセットが掲げられていた。

ああ……なんて好みのど真ん中なんだろうか。デザインーさんありがとう。

「ちよつと試着してくるね。あ、でもこれカップ数が違うや」

おもむろに下着セットを戻し、別のカップ数を手にする。

Eカップ……ですか。

「行ってくるから、ここで待ってて」

「待ってくれ！　こんなところで一人にしないでくれ！」

下着ショップで男が一人待つとかもはや拷問ごうもんだろ！

思わず戸祭にすがりつく。

「そんな怯おびえなくても大丈夫よ。他の下着でも見てて」

「無理だ！　頼むから一人にしないでくれ！　なんでもするから！」

「お座り！」

「俺はおまえのペットじゃねえ！」

そんな訴えもむなしく、戸祭は試着室へと消えて行った。

絶望的な気分を味わいながら戸祭を待つこと十分。

「え——うおっ!？」

不意に腕を掴まれたかと思うと、思いつきり引っ張られた。その直後、俺の両目になにかでふさがれる。

『大きな声出すとバレちゃうぞ〜♪』

戸祭の声が耳元で聞こえた瞬間、なにが起きたか悟った。

こいつ俺を試着室に引っ張り込んで両目を手でふさぎやがった!？」

『おまえなにしてんだ!』

『一人にしないでって子犬みたいな顔ですがるから』

俺たちは小声で言い合う。

『だからって一緒に入れろって意味じゃねえよ!』

『せっかくだから、似合ってるか見てもらおうと思つて♪』

な、なんだと……?？」

ということは、俺の後ろにはさっきの下着を身に着けた戸祭が立っているのか?？」

白レースで紐でピンクの下着を着けた戸祭が!？」

『見たい? 見たかったら振り返つていいよ……』

戸祭は優しく^{つぶや}眩き、目を覆^{おお}つていた手をそつと離す。

マジか? いいのか? いやだめだ! 耐えるんだ俺!

そんな理性と煩惱の葛藤も虚しく、戸祭があの下着を着けていると想像するだけで俺の中の天使と悪魔がハルマゲドンを開戦。秒で天使は白旗を揚げ、全面降伏してしまった。

理性が敗北した俺は、ゆっくりと振り返り――。

次の瞬間、絶望した。

「さんねーん。もう服着ちゃったあ♪」

そこにはすでに試着を終えた戸祭が、憎たらしい笑顔で笑いを堪えていた。

……もうこいつ殴っていい？

殴っても許されるだろ、なあ全国の男子諸君。

「さーて、サイズもバッチリだったからこれ買おつと♪」

「……………」

試着室を無言で出た俺の耳元で戸祭がささやく。

「期待しちゃった？」

「してねえよ！」

かんはっ
間髪入れずに言い放つ。

クツソ……全てを見透かしたような目で見やがって。

とはいえ、否定できないのだから悔しくても言い返せない。

俺は戸祭の後ろで小さくなりながら、会計を待ったのだった。



『家に帰るとカノジョがナニかしています』の試読版はここまでです。

お読みいただきましてありがとうございました。

続きは5月15日頃発売の製品版でお楽しみください！

※この試読版は製作中のものであり、製品版と一部異なる場合があります。